
忍姫イーリスの受難

七海星斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍姫イーリスの受難

【Nコード】

N4182P

【作者名】

七海星斗

【あらすじ】

四方を山に囲まれた国、アークジュエル。長年周囲の他国から侵略をうけながら、一度も敗北した事がない事から『無敵国家』と呼ばれるこの国の、外国に続く四方の四街道の一つがある地域を任されているカミジール男爵家。

国のトップしか知らされぬとある秘密を抱えたこの家には、四人の娘がいた。その三女、イーリス・ミル・カミジールがアークジュエル王国の王太子妃候補として王城に向かうところから物語は始まる。他の姉妹に比べ容姿に劣り、髪色瞳の色も異彩を放つ漆黒。外見が

ほかの兄弟と大きく違う中、しかしイーリスは誰よりも領民に愛されていた。

カミジール男爵家が抱える秘密。その中枢に在るイーリスを、領民たちは敬意と羨望を込めてひそかにこう呼んだ。

——忍姫、と。

これは、忍姫イーリスが王城を舞台に巻き起こすラブス……

「それにしても迷惑ここに極まれり、ね。そう思わない？ アイリス」

「まったくそうでございますわねえ、お嬢様。殿下もすぐに私たちを家にお返しになってくれればいいものを」

……し、忍姫イーリスが王城を舞台に巻き起こすラブストーリー！
始まります！

事の発端（前書き）

はじめまして、七海星斗と申します。

以前は別HNで別HPで作品を書いていたのですが、長らく執筆から離れていたため、今回リハビリという事で作品を書いてみました。

微妙に更新が不定期になると思いますが、どうぞよろしくお願いします。

事の発端

「……お話は分かりました。しかし、我が家から候補を出すつもりはありません、ミゲール様」

「しかし……。陛下からの打診でもダメでしょうか？ シーゲル男爵」

「何度言われても、我が家から出すつもりはありません。どうしてもというのであれば、領民から腕のいいの出させますが」

「それでは意味が無いと……」

丁寧に頼み込む宰相に、頑として受け付けない父。

その姿を見ながら、イーリス・ミル・カミジールは内心で深くため息をついた。

「ならば諦めてください。何度も申し上げている通り……娘をレンフィールド殿下の正妃候補として城にあげるつもりは無いのですよ、ミゲール様」

「ですから、本当に正妃に収まっていたただく必要はないのです。陛下や我々が期待しているのは、レンフィールド殿下の貴族令嬢嫌いを直すという、その一点のみなのです」

長女のフェリス・ミル・カミジールと次女のキキヨウ・ミル・カミジール、四女のシェリス・ミル・カミジールの三人と並んで座りながら、イーリスは目の前で交わされる会話を右から左へと流していく。

どうせ最終的には、自分が行く事になるのだろうと諦観を持ちながら。

アークジュエル王国は、エウロパ大陸の西側ある周りを山に囲まれた国だ。

国は広く、周辺国と比べると最も広い領土を持っている。

国の中央にある山に建てられており、その周りは四方の山から流れ出た水が集まってできた川に囲まれている。

大きい山が周囲にあるため攻めるに難しく護るに容易い地形だが、周囲の国々との国交が難しいという欠点もある。

それも数代前の王が街道を整備した事でだいぶマシになっているが、それにしても交通の便が悪い事には変わりがない。

エウロパ大陸の西部を全っているのは全部で五国。

東のシンクレア傭兵国。

西のダイレイス魔法国。

南のユーレスト神聖国。

北のカインスレフ技術国。

そして中央のアークジュエル諜報王国。

カミジール男爵家は、シンクレアへと続く街道の一つが出ている地域を納めている貴族だ。

とはいえ、その領地は小さく、中央の大都市へと商人などが通る際の中継地としての役割が強い。

その上カミジール家の領主は代々温和であり、平和主義者である。権力闘争自体が好きではなく、ただ自分の領地をそれなりに豊かにし、領民が飢えたり生活に過剰な不自由をしないように心を砕く傾向が強い。

そしてそういう性格だからこそ、諸外国へと続く街道の出口を任されてると言っている。

もつともそれは、表向きの話だが。

他の三街道は、全て国政の中心を担っている宰相・元帥・参謀長を務める三公爵が納めている。

それから言っても、カミジール男爵家がこの領地を任されている事が異常であるかがわかるだろう。

清廉潔白であり、またその温和な性格、そして過去に侵略があっ

た際には領民全と一丸になり援軍が来るまで防衛を成し遂げたと
言う事で、『鉄壁の忠臣』という名で呼ばれている。

現在、カミジール男爵家には四人の娘がいる。息子は一人もおら
ず、長女の結婚相手が男爵家を継ぐ形となる。

眼鏡をかけた優しい風貌の少女が、長女のフェリス。ほっそりと
した顔立ちに柔らかな金髪が印象的な、どこか儂さを感じさせる美
人である。年齢は十八。

自国他国問わず歴史について調べるのを趣味としており、眼鏡を
かけているのは本の読みすぎで視力を悪くしたからだ。

父と宰相の話に飽きたのか、フェリスに話しかけては窘められて
いるのが次女のキキョウだ。

フェリスと異なる銀髪で、少し勝気な顔立ちをしている。年齢は
十七。髪の色は母親からの遺伝だろう。ちなみに姉の金髪は、父か
らの遺伝である。

運動が得意であり、特に短剣術に秀でている。すばしっこい動き
と共に繰り出される剣は、カミジール家に仕える騎士でも新米では
絶対に捌けないと評判だ。

イーリスの隣でうとうと船をこいでいるのが、四女のシェリス。
フェリスと同じく金の髪をしている、まだ幼さが多分に残る十歳の
子供だ。将来美人間違いなしと評される愛くるしい顔をしており、
その性格は多彩な性格を持つ姉や両親たちにこれでもかと言うほど
甘やかされており、純粹で無邪気だ。

そして、自分――イーリスは、家族の誰とも似付かない黒目黒髪であった。年齢は十六。顔立ちも不細工までとは言わないが、姉妹たちに比べると一歩劣る。極めて平凡な顔立ちと言っている。父が言うには、死んだ祖母――イーリスからすれば祖祖母が黒目黒髪だったと言うから、隔世遺伝なのだろう。

性格は奔放にして豪快。勝気な姉をも振りまわすトラブルメーカーを自認しており、他者も諦めたような笑いをもってそれを認めるだろう。

野を駆け山を駆け、古今東西の書物を読んで兵法を学び、罨作りに精を出す。

おおよそ貴族の姫らしくないのがイーリスだった。

無論、男爵家の令嬢に恥じない躰はされている。姉や家族がそろって『酷い猫かぶり』と称するくらいに、本来のイメージにはそぐわないらしいが。

「フェリスは婿を取って我が家を継いで貰わねばなりません。キキヨウは先日想いを寄せていたバージル家の跡取りと婚約が決まったばかり。シェリスはまだ十歳になったばかりで幼すぎる」

「で、では、イーリス様なら」

「イーリスは、我が家の“要”です。宰相様であれば、その言葉が意味する所は分かるはずですが」

「……なればこそ余計にイーリス様には候補として王城に上がっていただきたいのですが」

「ダメです。イーリスは既に我が機関の長として職務に就いているんです。だからこそ、アレを家から出すわけにはいきません」

「む、むう……それは本当に困りましたねえ……。正直当てが無いわけではないんですが、それでも万全を期していたいんです。どうにかありませんか、シーゲル様」

「そう言われましても……」

はあ、とため息をつくい大人が二人。

そしてそれを苦笑しながら見ている姉二人と、不思議そうにきょとんとした顔をしている妹一人。

そんな場の状態を一通り眺めると、イーリスは深くため息をついた後立ち上がった。

「お父様、ミゲール様。私が正妃候補として出向き、正妃にならずに帰ってくればよろしいんですよね？ 候補の貴族令嬢に対しレンフィールド殿下が興味を持たれる様に仕向けた上で」

「え、ええ。イーリス様の言うとおりです。今回は正妃を決めるために爵位持ちの貴族から、候補を募っているのです。正妃さえ決まれば、他の候補様達が望むのであれば実家へとお返しする手はずになっています」

「ならば問題ないですね。所で、妃候補が集まるまで後どれくらいあるのでしょうか？」

「今からですと、一ヶ月後になりますね」

「なるほど……。わかりました、それまでに殿下に嫌われる振舞いを覚えて、目ぼしい候補者を絞ればいいわけですからね。何とかやってみせましょう」

とんとん拍子に話を進めていく。

姉たちは苦笑を深め、シェリスは「おねーちゃん、お嫁さんになるの？」と寂しそうな顔をする。

あまりの可愛さに抱き寄せて頭を撫でてあやしつつ、イーリスは視線を父へと向ける。

「侍女はアイリスだけでかまわないですよ？ お父様。その代わり、鼠と猫、鳩を今のうちから送り込んでおいてください」

「わかった。やれやれ……。ふがない父ですまないな、イーリス」

「あら、かまいませんわ、お父様。こうなる事は、すでに予想されていた事……。巧く嫌な女を演じられるかは分かりませんが、努力して嫌われてまいります。最も、そのせいで風当たりが強くなるかもしれません……。」

「それはそれで構わないよ。お前が失われる事になるくらいであれば、多少風が強くなった所で何ともない」

「あら、嬉しいですわ、お父様」

妹の頭を撫でながら話を続けていく。

宰相から殿下の好きな女性像を調べて手紙で送るといふ言葉を受けた後、この話しあいはお開きとなった。

さて、勝負は一月後からである。

事の発端（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

とりあえず、プロローグ。

王太子妃になどなりたくはないイーリスがこれから王城でどういう物語を紡いでいくのか。

それは作者にもわかりません。プロット実は作ってないですし。

行き当たりばったりで筆の向くままキャラの動くままに作品を作っています↑ダメな人

では、改めまして。今後ともよろしく願います。

12／13 次女の名前がイーリスの侍女と同じ名前だったのを修正。

行き当たりばったりで書いているからこうなるでござる

1／21 加筆および修正実施。

初顔合わせ（前書き）

とりあえず何話かストックはあるのですが……出し惜しみしつつ、今日は三話目くらいまで投稿しておこうと思います。

それ以降は執筆状況を見つつ、ちまちまと。

では、第二話、どうぞ。

初顔合わせ

アークジュエル王国には、現在二人の王子がいる。

第一王子にして王位継承権第一位の王太子であり王国騎士団の將軍職を務める、レンフィールド・メイス・アークジュエル。二十二歳。

第二王子にして王家を護る近衛騎士団の大隊長を務めている、リンスミート・メイス・アークジュエル。二十歳。

それ以外にも腹違いの兄弟が多くいるが、彼らは皆一様に王位継承権を破棄しており、家臣として仕えている。

レンフィールドもリンスミートも、正妃の子供だ。

国王であるブラッドリー・メイス・アークジュエルとは老齡であり、そろそろ王位をレンフィールド王子に譲るつもりでいるというのは、城内・城下問わず噂に上っている。

そんな中で問題となったのは、レンフィールドに正妃がいないと言う事だった。

アークジュエル王国は現在、国の周りを囲む四つの国々とそれぞれ平等な関係を築いている。

表向きは、だが。

しかし裏では各国がアークジュエルの領土を切り取ろうと手を尽くしており、それを往なしているという関係だ。

だからこそ。

他の四国は自国を優位にするべく、次王の正妃を狙っているのである。

アークジュエル王国は国力の強さを背景とした軍事力や、周辺国随一と言われる諜報能力によって恐れられている。

もつとも、現在の国土を得て以降は諸外国に武力を投じた事はない度もない。

全て、防衛戦なのである。

他国を侵略せず、他国に侵略させず。そんな事を数百年も続けているからこそ、エウロパ大陸の東部や北部、南部の様々な大国が休戦協定などの大事な条約を結ぶ時などに調停役として頼られている。

『無敵王国』、『永世中立国』、『調停国家』、『公正なる大国』などと呼ばれ、周囲の大国でアークジュエル王国に借りが無い国など存在しないと囁かれるほどである。

話がそれたが、そう言った理由で今周囲四国だけではなくエウロパ大陸の大国が、アークジュエル王国時期国王の正妃を自分の国の者にさせようと必死になっているのである。

だからこそ、正妃選び。

諸外国から正妃を娶ってしまつては今後の外交に影響が出るため、代々王位継承者第一位の者は国内から正妃を選ぶ慣わしだった。

だが、レンフィールドは二十二歳になつても正妃を選ぶ事をしない。

このままでは、諸外国から嫁を取る事になる可能性が増えていくばかりである。

そう判断した国王が、国内の全貴族の中から適齢期の娘を集め、妃候補として王子と交際させるといふ手段を取った。

そしてそれが、イーリスが王子の正妃候補として王城へ出向く事になった経緯である。

「ふう……。やはり王都は遠いわね、アイリス」

「はい、お嬢様。自分たちの身一つであればあまりそうは感じませんが、こう馬車に揺られての旅だとしてもそう思つてしまいませんか」

まったくだ、と二人して笑い合う。

イーリス達がいるのは、王城の西側に用意された一室。

集められた正妃候補達は、王城の四か所に分かれて宿泊している

のだ。

無論一人一室は与えられているが、無用なトラブルなどを起こさないように貴族間で中が悪い家同士を離したり、逆に良い家同士を近くにしたりしているのである。

王都に到着したのが一昨日の夜で、宿で一泊した後に登城したのである。

今回の件に当たり、イーリスが連れてきた侍女は一名だけ。

それが、腹心とも呼べるほどに信頼しているアイリス・ダージリンである。

調べた所他の令嬢たちは少なくとも五人以上の侍女を連れているらしいが、イーリスは一人だけである。

必要ないからだ。

それほどまでに、アイリスは優秀で――それに、いざとなれば人手を調達する手段はある。

「明日はお披露目のパーティーだったかしら？」

「はい。今回集められたのはお嬢様を含め十五名。本来は倍以上の人数がいたそうですが、素行等を調べた結果除外され、今の人数に落ち着いたようです」

「なるほど。まあ、そうでなくてもある程度人数は絞る予定だったんでしょうね。そもそも、爵位持ちの貴族がこの国に何家あると言

うのかしら」

「現在ですと、四十五家ですね。ちなみに、今現在の下馬評……というのは少々言葉が悪いですが、正妃候補たちで期待されている方々をお教えした方がよろしいですか？」

「いえ、大丈夫。それは知っているから。それよりも、ちゃんと準備はできている？ 殿下が好まない衣装や、言動のリスト」

「はい、それは勿論用意してあります！ あ、お嬢様のお好みの服もご用意させて頂きました。帰る時や部屋の中でもあの服ですと、少々目が痛みますからね」

くすくすと笑いながら返事を返すアイリスに、イーリスは仕方がない子ねえ、とでも言うような笑みを送る。

王子が好みじゃない服。

それはチャラチャラと宝石がちりばめられた豪華絢爛な衣装。

好まれない言動は、自分を売り込むような、権力やお金、そして見目麗しいと評判な王子の外見だけを褒めそやすような物。

どれもこれも過去王子が夜会などに出た際、話し終わった後でうんざりした様子を見せたと言う女性たちの特徴だ。

逆に好むのは、大人しく清楚ながら、一本芯を持つタイプの女性。

それはこれまで王子が『お手付き』した侍女達のタイプから見ても明らかである。

今の王妃もそういう女性であることから、若干マザコンの気があるのだろう。

「研究して演技の練習もしたけど、やっぱり私はああいうのは苦手よ。気づかれが激しい事激しい事」

「そうでございますねえ。お嬢様はどちらかと言えば、真っ直ぐな性格でございますから」

「そうよね。ここにいる間はストレスがたまるだろうけど……。レインフィールド殿下がちゃんと令嬢候補に興味を持つようになれば、私も帰れるわ」

「此方で調べた期待が高い候補の方々と仲良くしていただければ最高ですね」

「そうね。それに見切りをつけた女性は早く帰れるとミゲール様がおっしゃっていたから、出来るだけ早く嫌われて見切りをつけられてしましましょう。最初のパーティーでとりあえず売り込む群れに加わって、それ以外の方々を目立たせない」と

「はい。私も、他の正妃候補の方々を観察して、殿下がお嫌いになつていらっしゃるのしぐさや言動を調べる所存にございます。そうすれば、だんだん嫌がられるための精度も上がってくるかと」

「そうね、頑張らないと……。ああ、後それと風の術もよろしくね」

「はい、お任せ下さい。しっかりと殿下のお耳に入るよう、風を吹かせますので」

「私の方でも候補者の方々を操作できるように話を持ってくつもりだけれど、よろしくね、アイリス」

「はい、お任せくださいませ」

他の正妃候補やその親、後見人達が聴けば卒倒しそうな内容を話し合う主従。

そもそも今回のこれは、ただの依頼なのだ。カミジールからすれば。

言っでは悪いが現王が過去に行った手癖の悪さが、レンフィールの令嬢嫌いにつながっている。その尻拭いを押しつけられているに過ぎない。

王や三公からの依頼であるから断るに断れないし、またこの程度の事で余計な波風を立てるわけにはいかない。

何だかんだと言え、男爵家なのに王国の要地を任せられており王家からの信も厚いカミジール家を嫉む輩は多いのだ。

だからこそ、今回の話は断るわけにはいかなかった。こんなことで、変な言いがかりをつけられるわけにはいかないのである。

「ま、何にせよ明日ね、明日。明日が最初の勝負で、一番肝心な時間だわ」

「そうでございますね。頑張って、殿下に嫌われなくては」

「ええ。そのためにも、今日は早く寝て英気を養わなければね」

「はい！　おやすみなさいませ、イーリスお嬢様」

「おやすみなさい、アイリス。貴方に良い夜と良い夢が訪れますように」

「皆の者、良く集まってくれた。皆様々な事情があっただろうに、こうして私の我儘で集まってもらい感謝する。さて、この中から正妃を選ぶ事になるが――チャンスはみな平等でなければならぬ。また同時に、試練も。故に今宵は全員が会する場を作った。先に通達していたが、今日この場で王子に気にいらなかった七名は、候補から外すものとする。

残った者たちは既に申し伝えてある通り、今宵からおおよそ半年の期間を設けて、我が息子、レンフィールドとの交流を行ってもらおう。そして息子に見染められた場合、そのまま正妃へと迎え入れよう」

パーティーは、王の言葉から始まった。

集められた正妃候補の令嬢たちは殆どが煌びやかな衣装に身を包み、王の言葉などそっちのけで食い入るように王子の事を見つめている。

ただ数人はそう言う様子を見せず、むしろ料理やそれらの令嬢たちを興味深げに眺めているのが印象的だった。

もちろん、イーリスは前者であり後者だ。

派手な衣装を着て、王子を値踏みするような失礼な視線を意識して投げかける。

そのくせ頭の冷静な部分ではその王子へ熱い視線を送る様子を観察し、どうすれば効率よく王子に嫌われるのかを考えていた。

そうこうしているうちに、パーティーが始まる。いわゆる自由時間だ。

他の令嬢たちは我先にと王子へと殺到する。

それを見てイーリスも少し慌てながらその場に移動する。

変に遅れたり傍観して、王子に印象付けて覚えられては困るからだ。

「殿下、よろしければ私と一曲踊っては頂けませんでしょうか？」

「いえ、それよりも殿下のお話を是非ともお聞きたいのですが。確か、去年の剣術大会で優勝なさっておりますよね？」

「そんなことより、殿下。殿下はお酒を嗜みなさるのでしょうか？我が家で取り寄せた質のいいお酒を持ってきたのですが……」

群がる令嬢たち。

我先に、とアピールする様子を見ながら、レンフィールド王子は辟易とした顔を見せる。

次いで周りを見回しながら、動こうとしなかった令嬢たちを見て興味深そうな顔をしたのも見逃さない。

やった。

これで最初の興味対象からは逃れられたはず。

王子が煩わしいと思う令嬢たちの集団に自分も入れた筈だ。

要は、この時間。

王の言葉通り、ここで上手く気にいらなかった七名に入れば、それでもう実家に帰れるのだ。

何としても嫌われなければならない。

幸い、王子に興味を持っていない令嬢たちは全部で三名。

そして王子をかなり熱っぽい視線で見つめながらも、この争奪戦に加わらなかった令嬢が一名。

おそらく、彼女たちは残されるだろう。王子の好みは、控えめで分別をわきまえているか、権力というモノにさほど興味を示さず、それでいて頭の切れる女性だ。

つまり残りの十一名の中で切られる七名に入ればいいのだ。割と楽。

万が一残ってしまった後は、王子が執務などを行う間の暇な時間

——つまりは休憩時間を使い、候補者数とお茶会を行う予定だ。

初日から七日間は二人一組で、毎回組み合わせを変えながら、それ以降は王子が気に言った令嬢たちと一対一で行う事になる。

そして最初の組み合わせは王子とその従者、そして王子と比較的年齢の近い側近で決められると情報を得ている。

万が一残ったとしても、最初の組み合わせが今回王子に群がっていない令嬢たちと組み合わせられればいい。

比較対象として、引き立て役として選ばれたと言う証拠になる。

自分のたくらみが上手くいった事に安堵の思いを得て、少しだけ力を抜く。

思わず素の笑みがこぼれそうになるが、慌てて自重。

周りの令嬢が浮かべているような値踏みするような笑顔を浮かべながら、イーリスは王子へと声をかけていった。

一瞬の安堵を——全体を俯瞰していた一人の騎士に、見られた事に気づかないまま。

「つ、疲れた……。くそ、これが父上の命でさえなければ即座に逃げ出すものを」

正妃候補お披露目パーティーと銘打たれた騒ぎが終わり、レンフ

イールドは側近である近衛騎士、キース・ウーヴァと共に自分の私室へと戻ってきていた。

ぐったりとソファアに座りかけ、背もたれに体重を預ける。

一目で疲労困憊だとわかる姿を見せながら、レンフィールドはキースへと視線を向けていく。

「で、どうだった？ キース。明日の執務時間までにこれからの茶会に関する組み合わせを決めなくてはいけないんだが。お前の目にとまったのはいたか？ いたなら積極的に口説いてしまえ。その方が楽だ。出来るだけ数は減らしたい」

嫌気がさしたような口調で問いかけてくる主に、キースは深いため息をつく。

「……レン、そういう事を言うな。気持ちとは分らないでもないが、国の未来のためなんだ。言われなくても分かっているとは思うが。確かに望まない相手との結婚になるだろうが、完全に意志を無視された政略結婚じゃないだけマシだろう？」

第一王子に対する言葉づかいではない。

だが、キースはそれを許されていた。

レンフィールドの、異母弟として。

「それはそうなんだが……。だが、正直目ぼしい女性は何もないな。分かってはいたが、どうして女と言うのはああもやかましいんだ……。まだ花街の女郎たちの方がましだ。あいつらは分別を

わきまえてるからな」

「レンっ！　口を慎め。もし誰かに聞かれていたらどうするつもりだよ、お前」

「大丈夫だ。ここはアレらの部屋からは離れているし、そもそも王族の部屋まで入りこむ無礼な事をする者など、おるまいさ。いたとしても気配でわかる。それでも伊達に將軍職はやってないんだぞ？」

「しかし、どこに耳があるか分からないんだぞ？　今回はいいが、今後は気を付けてくれよ、頼むから」

分かった分かった、とレンフィールドはうるさそうに手を上げる。

「今回帰す七名だがな。パーティー当初から俺に群がって来た連中の中から適当に選んでおけ」

「……積極的にアピールしなかった連中はどうするんだ？」

「彼女たちの方が好ましい。駆け引きを色々出来るだろうしな。それ以上に、今日俺に纏わりついてきた連中は、正直うんざりだ。やれ私の実家はだの、やれ俺の武勇伝だの、やれ美しさだの、やれあの連中は美しくないなど——五月蠅い事この上ない」

辟易している様子に、キースは内心でため息をつく。

レンフィールドは、政務など以外の、私的な煩わしい事が嫌いだ。苦手と言い換えてもいい。

特に女性関係——父王が多くの側室を持っていたせいで、彼は女

性関係のトラブルというモノを嫌というほど見てきた。

それは異母兄弟である自分が、良く知っている。

キースは現在二十二歳――レンフィールドと同じ年だ。

ほぼ同時期に生まれ、一緒に育ってきたため乳兄弟とも言える。

母が死んだのをきっかけに王位継承権を破棄しウーヴァ家に養子として迎え入れられてからはそうでもなかったが、それ以前は自分も後宮内の権力闘争の駒だったのだから。

「では、最初から集まった令嬢たちから候補から外すのを選ぶな？」

「ああ、そうしてくれ。後、どうせ残すならお前が気にいったのを残せ。その方がまだ安心できる」

「俺が気にいったの、か？」

そう言われて、思い出すのは一人の令嬢。

レンフィールドの下に集まった中で、一人だけ異彩を放つ空気を一瞬だけ放った、あの少女。

資料ではカミジール男爵家の三女とあり、その性格も嫉妬深く権力に対するこだわりが強いとある。

そのため、カミジール男爵家でも鼻つまみ者だと。

確かに、今宵のパーティーでも欲に取りつかれた顔をしていた。

だが。

王子から非常に冷めた視線を向けられ、それが離れた瞬間に一瞬だけ浮かべた、してやったりと、安堵したとでも言うような表情。

本当に一瞬で、その後は直に元の表情へと戻った。

しかし。

キースの勘は、ほんの僅か垣間見えたあの顔こそが、あの令嬢の本性に思えたのだ。

だからこそ、思わず答えていた。

「あえて言うなら……カミジール男爵令嬢か」

「何!？ 今日のパーティーでも、一際ギラついた目で俺を見てた女だぞ、それは」

「ああ。だが……おそらく、あれは……」

「ああ、いい、わかった。キースの趣味にどうこう口を出すつもりは無い。カミジール男爵令嬢は候補の中に残しておくから、存分に口説くといい」

思考に埋没しようとしている中、レンフィールドの辟易とした声で我に帰る。

視線を上げると、そこには憐れんだ表情を浮かべる異母兄の姿が。

「いや、そういうわけじゃなく！ あの令嬢は……っ！」

「わかったわかった。容姿は他の令嬢には劣っていたが、確かに悪くない。まあ、なんだ。色々絞り取られないようにしろよ？ 何だかんだ、お前のウーヴァ侯爵家も地位は高い。男爵家から見れば垂涎の相手だろうしな」

「話を聞けってレン！ だから——っ！」

「良いつて言ってるだろ、キース。とりあえず、後は任せた。お前の方で適当に残りの三名を選んでおいてくれ」

俺は風呂に入ってくる。

そう言って疲れた顔で部屋を出ていくレンフィールドの姿を見送り、キースはがっくりと肩を落とした。

「そうじゃない、ってんのに……」

まったく。

もしかしたら、この令嬢はとんだ疫病神なのかもしれない。

そんな事を思いながら、キースは用意された資料の中からカミジール男爵令嬢のモノを取り出すと、候補者として残すグループへと追加する。

———これが無ければ、きっと話は上手くいっていたはずなのだ。

イーリスは早々に実家に帰るふりをして城に残り、王子の令嬢嫌いを直すのに集中しただろうし、キースは変わらぬ日々を過ごしていただろう。

だが、賽は投げられた。

運命は大きくうねり、変化していく。

イーリスもキースもカミジール家もアークジュエル王国も。

全て例外なく、この決定が生み出した波紋によって変化していく。

それが良かったのか悪かったのか。

判断できるのは、後世の歴史家のみだろう。

初顔合わせ（後書き）

1／21 加筆修正。キースのレンフィールドに対する口調など

最初のお茶会（前書き）

というわけで三話目でございます。

これで一応連続投稿はストップ。

できれば毎日一話ずつ更新できればいいなあ、と思いつつ、とりあえず頑張っていきます。

では、お楽しみくださいませ。

最初のお茶会

「私が残ったの!? これは予想外だったわね……」
「そうでございますねえ……。かなりばっちり嫌われたと思ったのですが」

パーティーの翌日。その午前中。

宛がわれた部屋で、イーリスとアイリスの主従二人は慎ましくお茶会を開いていた。

そんな中、一通の手紙が届けられる。

それは午後からレンフィールドと行うお茶会について説明されたものであり、何時にお茶会の会場——城の中庭に行けばいいのかも書いてあった。

つまり、イーリスは選ばれてしまったのだ。

十一分の四に。

「何がいけなかったのかしら……。十分以上に嫌われた感触はあったのけれど」

「かなり嫌そうな目でお嬢様の事を見ましたものね、殿下は」

思い出す。

周りの令嬢たちと同じように自分を売り込みながら、その一方でかなりギラギラと欲望に満ちた目で王子を見ていたのだ。

最後の方に至っては、イーリスが話しかけようとするそぶりだけでかなり嫌そうな顔をしていた。

だからこそ、今日でもう帰れると踏んでいたのだが。

「困ったわね……。とりあえず原因を掴まない事には何とも言えないわ。アイリス、申し訳ないけど」

「はい、心得ています。直に鼠から情報を集めてまいります」

阿畔の呼吸で頷く従者に、イーリスは満足げに頷く。

「お願いね？ 出来れば私のお茶会までには、どういう経緯で私が候補に残る事になったのかを知っておきたいわ」

「任せておいてくださいっ！ お嬢様もご存じのとおり、ウチの鼠は賢いので！」

それでは行ってまいります、と告げてアイリスは部屋から出ていく。

鼠に渡りを付けるためだ。

誰もいなくなった部屋の中で、イーリスはだらしなく姿勢を崩し窓から空を見上げる。

ため息をひとつ。

「はぁ……。まったく、面倒な事になりそうね」

今日の出方次第では、早めに父に手紙を出す必要が出てくるかもしれない。

あるいは、幾つかある切り札をひとつ切る嵌めになるかもしれない。

その事を考えると、どうにも憂鬱になるイーリスであった。

結局、原因がわかったのは昼食の時間だった。

鼠から色々と仕入れてきたアイリスが報告してくれたところによ

ると、どうやら原因はレンフィールドの異母弟にして近衛騎士であるキース・ウーヴァにあったようだ。

その詳細な事情までは分からないが、キースがイーリスの事を気にかけた事で、残留する八人の中に含まれてしまったらしい。

「……余計な事をしてくれたわね、キース様は」

「本当に。厄介でございますねえ……。脅すにしても未来の王弟様でございますからね、迂闊に手は出せませんし」

「それもそうだけど、重要なのはどうして私を気にかけてか、よ。家業の事は知るわけがないし、そうなるの間違いなく昨日のパーティーが原因。一瞬だけ油断した時があったからそれに気づかれたのかしら」

「なるほど。運が良いと言いますか悪いと言いますか……。それんしても、お嬢様がセルフコントロールを失敗するとは珍しいですね」
「ええ、本当に。あまりにも上手くいきすぎたので気が緩んだのね、今後はより引き締めないと」

アイリスが仕入れてきた情報の中には、今後の正妃選定に関わる二つの段階についてもあった。

一つ目は、これから二ヶ月後。丁度期間の三分の一に達したところで、王子がもう選ばないと判断した四名が切られる。

その二ヶ月後さらに二名が切られ、最終的に残った二人から正妃を決めるとの事。

つまりイーリスからすれば、二ヶ月後の節目でこの状況から脱出するのが次善の理想という事になる。

「……少し長丁場になるけど、だからこそ丁寧にやらないとね。万が一ボロが出てしまつて、あり得ないと思うけど殿下に気にいられでもしたら目も当てられないわ」

「そうでございますね。とはいえこの部屋ではお嬢様も気を抜かれ

たいでしようし……。この部屋に張り付く鳩がウチの者になるよう手を廻しておきました。これで情報操作は簡単です」

「よくやったわ。出来る部下を持つと幸せね？　それでは、情報操作の方は頼むわよ、アイリス」

「はい、お任せくださいませ、お嬢様。後念のために、猫を何匹か呼んでおきましようか？」

「どうしようかしら……。早々必要になると思えないけど、念には念を入れておきましようか。鷹と土竜も用意しておいてね」

「かしこまりました」

鼠、鳩、猫、鷹、土竜。

アイリスとの会話で用いたこれらの単語は、隠語である。指し示す者は――間諜。

鼠とは貴族の屋敷などに出入りする従者や裏社会で働く日蔭者となり情報を収集する潜入者。

鳩とは要人の部屋に忍び込み、情報を手に入れてくる侵入者。

猫とは敵方の鼠や鳩を見つけて捕まえ、情報を奪い取る狩人にして拷問官。

鷹とは情報を迅速に目的地へ運ぶ伝令役。

土竜とはありとあらゆる罠に精通しており、それを仕掛けたり解除する仕掛人。

それらを用意するアイリスはと言えば、要人の傍に侍り要求を満たしその身を守る護衛者――犬。

そしてアイリスは彼らを統括する人間――調教師。

つまり、アイリスたちカミジール男爵家というのは、間諜の一族なのである。

カミジール男爵領は間諜の育成機関であり、その住人の実に九割は何らかの諜報技術を持っている。

国内最大にして最も知られていない諜報機関。それこそが、カミジールなのである。

上に挙げた種別以外にも、旅芸人などの姿で各国を渡り歩き情報を収集する渡り鳥や噂を広める事に特化した九官鳥、敵国に侵入し敵国の住人となって情報を収集する兎、敵国の上層部に入りこんで自分たちが有利に事を運ぶよう支援する蝙蝠などが存在している。

カミジール男爵家が間諜だと言う事実は、アークジュエル王国にとって秘中の秘。その事実を知っているのはカミジール男爵家の者とその領民、王、三公だけなのである。

理由は簡単で、それだけの力を持ったカミジール家が、他の有力貴族たちの標的にならないため。

今の世の中ではとある事情により、腕のいい間諜というのは喉から手が出るほど欲しく、しかし絶対に敵に回したくない相手なのである。

情報を握られているかもしれないと言う疑心暗鬼は、たやすく権力者たちを暴力の道に走らせる。

それをよく知っているからこそ、カミジールの秘密は決して表に出せないのだ。

もしこの秘密が表に出た場合、男爵家は即刻解体し他の国に移住する。

そう、カミジール家がアークジュエル王国に参加した時に取り決めがなされているのである。

無論、カミジール男爵家以外にも諜報機関はある。それは貴族なら知っていて当然と言うような、有名な機関だ。

それとは別に、各家でお抱えの間諜を持っていもいる。

王子も当然持っている。

無論その中には、王子の子飼諜報員という立場に収まったカミジール家の鼠がいるのだが。

「とりあえず、様子見ね。ああ、午後はどんなドレスを着ていけばいいかしら」

「昨日のようにむやみやたらに派手にするのもいいですけど……」

昼間から着るにはふさわしくありませんものねえ」

「そうなのよね。まあ、各種殿下がお嫌いそうな服は持ってきてあるから良いのだけれど」

まったく、面倒な事になった。

それもこれも、キースが悪い。

そう思いながら、お茶会の準備をするためにイーリスは立ち上がる。

そして着替えのために寝室へ移動しようと扉を開いた所で止まり、昼食の片づけを行っているイーリスに向かって指示を出す。

「後しばらくは自力で何とかするけれど、他の正妃候補や城の侍女たちから王子の趣味や、逆に嫌いな事を調べてきてちょうだい。出来れば十日前後でよろしくね？ 私を陥れたいとでも事情をでっちあげて哀車をかけなさい。まあ、風流に取り入る、という方が正しいのかもしれないけど」

「はい、承知いたしました」

にこやかに頷くイーリスに頼んだわよ、と告げ、イーリスは寝室に消えていった。

昼食の片づけを終えたイーリスは、さっそくイーリスからの指示を行うために城内を歩いていた。

それも、分かりやすく不機嫌そうな顔をしながら。

目的は情報を得やすい相手を探す為。ターゲットにしているのは後宮勤めの侍女達だ。

前もって手に入れた情報では、後宮に数多くの側室がいるため、

派閥争いがひどいらしい。

それに側室の大部分は我儘であり、とても高慢だと聞く。

その上城付きの侍女ではなく、自分の実家から侍女を連れてきて世話をさせる始末。城付きの侍女がミスをすれば嘲笑い、無能だと罵る。

つまり、後宮勤めで城付きの侍女は、側室たちに大いなる不満を持っている事になる。

イーリスの指示は、そう言った不満を持った侍女に近づき――自分の主が如何に酷いかを訴え、その主をどうすれば王子の正妃候補から外せるかを聞き出せ、という物だ。

無論、アイリスが語る酷い主人――すなわちイーリス像は嘘八百である。

それは、イーリスがこの王城内でそう振る舞うと決めた偽りの姿であり、本当の姿ではない。

元々、イーリスは社交界でも一切噂に上る事の無かった人物だ。それもそのはずで、カミジール男爵家から公の夜会に出席していたのは当主であるジルベールと長女のフェリスだけだ。

私的な夜会にしたって、イーリスは滅多に参加しなかった。参加したとしても、上手く自分を偽ってその他大勢の中に埋没した。

だからこそ、イーリスの情報は殆ど出回っていない。

王城関係者が知るイーリス像は、先日正妃候補の書類審査の為に集めた資料のみ。

その資料だって、カミジールと事情を知る宰相の手で王子の好みとは程遠い設定にしてある。

無論、アイリスと二人きりになる私室以外ではイーリスは設定どおりに振る舞っており、関係者からの評価は低い。

王城に付いてからの二日間で人前でヒステリーを起こしアイリスを叱りつけたり、我儘でアイリスを振りまわしたりもした。

それもこれも、哀車の術や風流で取り入る術を成功させるための前準備だ。

哀車の術。

相手の同情を買う事で、此方にとって都合のいい展開を作りだす話術の事だ。

風流で取り入る術。

人の趣味に付けいる、あるいは同じ趣味や共通項を持つ事で仲良くなり、情報を引き出す際す話術の事。

即ち、酷い主人に仕えていると言う事で同情を買い、同じく酷い主人に仕えていると言う共通項を使って他の侍女・使用人と仲良くなる。

結果的に言えば、この二つは面白いくらいに成功し――アイリスは主人が望む情報を上手く得る事が出来たと共に、城内で知己を得る事に成功した。

それも噂話が好きな上に様々な情報を集めてくる侍女たちと、だ。今後の為の繋ぎを得たアイリスは、帰り際に城に潜入していた鼠と接触。

鳩の件と、猫や鷹など追加の間諜を呼ぶ事を命じ、敬愛する主が待つ部屋へと戻って行ったのであった。

「そう、殿下は女性が政に関わる事を嫌うのね？ 同時に、戦略遊戯のような戦略を考えさせるようなゲームなんかを女性がするのも苦手」

「はい。殿下は女性が戦の事や政治に口を出すのを酷く嫌がられるそうです。それはひとえに陛下が最前線にいた側室の言葉で政治を動かしていたのを見ていたからでしょう、というのが後宮付き侍女達の間で一番真実に近いのでないかと言われている話ですね」

王子とのお茶会まで後一時間という所。

自分でも所時期に合わないと思う豪華なドレスに着替えながら、

イーリスはアイリスからの報告を聞いていた。

「それでは、とりあえず今日は殿下が嫌がる女をやりながら、機会があれば戦略遊戲の話題を振ってみましょうか。もしかしたら、殿下自ら私を苛めに来るかもしれないから」

「……なるほど、そして殿下に苛められてヒステリーを起こす、という流れでございますね。かしこまりました。場の流れにもよりませんが、見事帰り道で粗相をして見せます！」

力いっぱい力説するアイリスに「よろしくね」と笑いをこらえながら告げ、支度を終える。

「今日同席するのは、シレット子爵令嬢だったかしら？」

「はい。ファミルス・シク・シレット子爵令嬢様ですね」

テーブルに戻ると、アイリスが今挙げた人物の資料を取り出し、イーリスの前に広げてくる。

ファミルス・シク・シレット。二十歳。

父のダミル・シレット子爵は軍部の大将の一人だ。豪剣でならし、二十年前の戦では敵の大將首をいくつも挙げた武闘派らしい。

昨日のパーティーで陛下に興味を持たなかった令嬢の一人で、趣味は武術鍛錬や遠乗り、とかなり男勝りなお嬢様である。ちなみに長女で、双子の兄がいる。

良くも悪くも素直で実直、自分の言葉には責任を持ち、自分の非ははっきりと認め、謝罪も躊躇わず行う素直さがある。

嘘が付けない、腹芸が心底苦手なタイプだ。

本人もかな嫌々今回の正妃選びに参加したらしく、昨日は始終王子の親衛隊に所属している兄とばかり話していたらしい。少々ブラコンの気があるとか。

嘘を好まず実直な性格であり、真面目。清廉潔白な騎士を目指し

ている、とある。

「間違いなく本命はファミルス様ね。私は当て馬……というよりも比較対象かしら」

「そのような意図が働いているかと。他の組みも調べましたが、全て昨日殿下の傍に寄らなかった方と寄って行った方という組み合わせになっています」

「これ以上ない程に分かりやすいわね……。ま、その方が楽でいいけれど。ただ問題は……」

「ファミルス様の出方、でございますね」

「ええ、そうね。これが他の令嬢であれば……ルフーナ公爵令嬢とかであれば、まだやりやすかったのだけれど」

シーリン・イフ・ルフーナは、昨日のパーティーで王子に熱っぽい視線を送りながらも、強気に出る事が出来ず静かに控えていた女性だ。

ちなみに年齢は十六。イーリスと同年である。

三公の一人であるシーグレット・ルフーナ元帥の次女で、長女はすでにキャンディ侯爵家の長男を婿に迎えている。

聡明だが奥ゆかしく、他者にも優しい少女だと評判であり、今回の正妃候補の中でイーリスが個人的に目を付けている相手でもある。無論、王子の正妃として。

そう言う相手ならばとことん対照的な人間を演じれば済む。相対的に相手の株が上がり、イーリスの株は奈落に落ちる。だが。

ファミルスを上げて自分を下げるというのは、非常に難しい。

印象の操作は得意だが、しかしファミルスも何だかんだと王子の好みの対極にいる人間である。

そもそも、ファミルス自体が王子に興味が無い。

資料には兄の同僚である近衛騎士の一人に恋愛感情を持っている

可能性が高いとある。

なれば余計に、王子の正妃候補からは外れたいはずだ。

おそらく、だからこそ昨日は王子を一顧だにせず兄とばかり話していたのだろう。

そうすれば、早々に候補から外れると思って。

だが、それが裏目に出て残ってしまった。

だからこそ、分らない。今日のお茶会で、彼女がどういう態度で出てくるかが。

それに、厄介なのがファミルスがそれなりに強い剣士だという事実。

かなり上手く偽装——意識して身体の動きを操作しないと、無意識で鍛えた所作が出て、演じている事に気が付かれてしまうかもしれないのだ。

ファミルスの性格から言って、間違いなくその事を追及されるだろう。

「最初から難易度が高いわね、本当に……」

「頑張りましょう、お嬢様。私も出来る限りのサポートは致しますので」

「そうね、よろしく頼むわ。最善が私がさらに殿下に嫌われ、ファミルス様が殿下の正妃候補として今後も頑張ると言質を取る事、事前がそのどちらか、最悪が私の意図が白日にさらされる、か。ま、何とかなるわよね」

「ええ。お嬢様なら、この程度簡単に乗り切れますわ」

「買いかぶってくれちゃって……。ウジウジ考えるのも性に合わないし、そろそろ行きましょうか」

「はい、お嬢様」

戦略やらなんやらを考えるのは好きでも、こうやって男女間の問題を考えるのは苦手だ。

つくづくこう言う事には向かないとため息をつき、イーリスはお茶会の会場へ向けて歩き出した。

最初のお茶会（後書き）

というわけで、最初の連続投稿の最終話でした、まる。

文章を書くのが久しぶりなので色々変な部分もあるとは思いますが、気になった点などございましたらご一報をお願いします。

誤字脱字や表現方法、行間の取り方など、色々ご意見を聞いてみたいので、どうぞ遠慮容赦なくいじめてください（マゾか

それでは、次話投稿までしばしの御別れを

自己紹介（前書き）

というわけで、第四話です。今回は少し短め。

というか、他の方々の作品を読んでいると、もう少し文章ボリューム挙げたほうがいいんじゃないかな……。短く感じる今日この頃。

あるいは、行間をもっと空けるべきなんじゃないかな？ 読みにくかったりするのでしょうか。

まあ、それはさておいて、第四話、お楽しみくださいませ

自己紹介

「それでは、ごゆるりとご歓談くださいませ」

「ああ、下がれ」

ふかぶかとお辞儀して去って行ったのは、後宮の侍女を統括する女官長だ。

このお茶会のセッティングなどを任されているらしく、今日も事前に注意事項などをイーリス達に説明してくれた。

お茶会は、王城の中庭で行われる事になった。

丸いテーブルに、レンフィールド、ファミルス、イーリスがそれぞれ三角形を描くような形で座っている。

ファミルスは健康的な美人であり、すらりと背が高い。プロポーシヨンも豊満とは言えないが、スレンダーで整っている。

銀色の髪を項のあたりで縛り、纏めて背中に垂らしている。顔立ちもキリリとしており、鋭い中に女らしい優しさと愛らしさを同居させていた。

運動能力の高さは、この席に現れてから座るまでの所作で十分に確認できた。

着ている翡翠色のドレスも装飾が少なく、動きやすさを重視しているのが見てとれる。自分が今着ているごてごてとした動きにくい見た目だけの服とは対照的だ。

化粧も薄く、最低限。これも、今は派手に目立つ化粧をしている自分とは対照的。

もっともイーリスにしたって、こうして目立つ格好をしているのにはいくつかの理由があるが、それは今この場には関係が無いので割愛する。

侍女が用意した紅茶の匂いに目を細めながら、イーリスは同席している二人の様子を観察する。

レンフィールド王子は、正直かなりイライラしているようだった。

朝から休憩の合間を縫うようにして既に三回もお茶会を行っており、調べた最新の情報だと、どのお茶会でも当て馬の令嬢が派手に自分をアピールし、本命の令嬢たちはそれを冷めた目で見たり、うろたえたりしていたらしい。

王子からすれば、もううんざりという感じなのだろう。

ファミルスと言えば、此方もむすつとした仏頂面だ。よほど、このお茶会が気に入らないらしい。

王子の後ろに控え、心配そうに見ているのがファミルスの兄、カイル・シレットだ。王子を護る近衛騎士の一人であり、階級は小隊長。エリートだ。

妹の態度が無礼にあたると、相当心配しているらしい。顔色が悪い。

どちらも、自分以外を無視して紅茶に口を付けている。

そのくせ、お前から先にしゃべれとでも言うようにを牽制するものだから、正直言って空気が悪い。

ちなみに、牽制相手にイーリスは含まれていない。

眼中にないのだ、イーリスの事など。

そしてこんな場合でも空気を読むのが、イーリスだ。

空気を呼んで、空気が読めてない行動をする。

「……お静かですわね、お二人とも。とりあえず、今一度自己紹介を。殿下には昨日名乗りましたが、ファミルス様とは昨日のパーティーでお顔を拝見させて頂いていましたが、ほぼ初対面のようなものですし」

苛立ちを含んだ二対の視線がイーリスに向けられる。

うざったい、と明確にその視線が主張していた。

だがそんなものでひるむイーリスではない。

「私は、イーリス・ミル・カミジールと申します。カミジール男爵家の三女ですわ。趣味は楽と、最近になって戦略遊戯というものに傾倒してしまいました。家では、私に勝てる相手がいない程になっていますわ」

イーリスの言葉に王子は蔑むような視線を送り、ファミルスは冷笑を浮かべる。

空気を讀まず発言したイーリスを馬鹿にした視線だ。

同時に、女だてらに戦略遊戯をする事に対して、そして井の中の蛙である事に対して嗤っているのだろう。

そして二人とも沈黙。

再び、どちらが先に発言するかで牽制を始めたのだ。

それを見て、イーリスはファミルスの評価を下げる。

阿呆だ。

こう言う場とはいえ、ファミルスは臣下なのだ。

如何なる理由や事情があろうと、名乗りをする順番を巡って王子と牽制し合うなど、不敬にも程がある。

それを理解しているのか周りではファミルスに対して非難するような視線が浮かび、カイル等は顔面蒼白でファミルスの背中を睨んでいる。

いい加減にしろと、王子さえいなければ怒鳴りつけていそうだ。

仕方がない。

助け船を出すでしょう。

「あら、ファミルス様は自己紹介も出来ないのでしょうか？ まったく、これだから剣を振るしか脳の無い野蛮な方は困ったものですね。教養というモノをお持ちではないのですか？」

「な——っ！」

イーリスの挑発に瞬時に激高する。
顔を赤くし立ち上がり、音がするぐらいに歯を食いしばった。

「私が自己紹介をしたと言うのに、だんまりとは失礼ですわよ？」

殿下も貴女が発言するのを待ちだったと言うのに。これで万が一殿下に先にお名乗り頂いたとしたら、貴女は礼儀も知らない田舎者という事になるでしょうに。それくら、お分かりにならないのですか？」

「っ、っ……！ ファミルス・シク・シレットだ——です。シレット子爵家の長女で、殿下の後ろに控えているカイル・シレットとは双子の兄妹になります。趣味は遠乗りや狩り、剣技を鍛える事。戦略遊戯も父の影響で嗜みますが……それは別に大したことではありませんね」

怒り心頭という顔でイーリスを睨んだ後、その怒りを噛み殺して自己紹介を始める。

感情のコントロールが早く、一度場を認識すればそれを意識した行動が出来る。

自分の感情に正直すぎる点が欠点であり美点とでも言うべきか。口調を丁寧に直したのも好感が持てる。

此方が戦略遊戯の事を口に出したから自分も対抗するように話題に出すなど、可愛い所もあると思う。

素直でいい子だ。

言うべき事を言い終わると、イーリスを睨んだまま椅子に座り直す。

横目でちらりとカイルを観察すると、安堵の表情を浮かべていた。それでも、顔が蒼い事には変わりがないのだが。

「……知っているとは思いますが、第一王子のレンフィールド・メイス・アークジュエルだ。趣味は……なんだろうな。武術の鍛錬は好むが、

最近はあまりしていない。時間が取れずにな。ああ、知りたいだろうから教えておくが、俺は今回の一件、乗り気ではない。最終的に誰も選ばない、という選択肢があるかもしれない事をよく覚えておけ」

次いで発言したのは王子だ。

気だるそうな表情で淡々と自己紹介を行い、二人の正妃候補をどうでも良いというような視線で見る。

その仕草に、イーリスは内心でマイナス点を付ける。

正直なのは美徳なのかもしれないが、この場だけで言うならば欠点だ。

阿呆と言ってもいい。

王子が乗り気でないのなど、昨日のパーティーで候補者全員が悟っている事だろう。

何せ、令嬢たちを見る視線には嫌悪と蔑みの色しかない。

腹芸をこなしていかなばならない王太子の身分で、いくら相手が女性ばかりとはいえそんなあからさまな態度でどうしようと言うのか。

集まった中に、イーリスのようにいずれ使えるべき主の品定めに来ている人間がいるとは考えないのだろうか。

王たるもの、そう簡単に自分の内心を気づかせてはならない。

分かり易ければ分かりやすい程、周りから利用もされやすいのだから。

無論、かといって閉ざしすぎれば今度は理解が得られない。

理解が得られなければ周りから疎まれ、排斥される恐れもある。何事も適度に。

時々感情を見せ、普段はうちに仕舞う。普段と感情をあらわにした時のギャップが大きければ大きいほど、臣下は王を畏れるものなのだから。

今回、そして昨日の態度も、あえてそうして見せているのであれ

ば文句は無かった。

自分の態度が周りに与える影響というモノをよく理解し、その態度を見せる事で何らかの成果を得られるのであれば重畳。

以前も言った通り、イーリスの言動や服装などにも意味がある。わざと衣装や化粧、言動を派手にすることで、普段の自分に戻った時に気づかれにくくする意図があるのだ。

無論、王子に嫌われると言う意図も大きいが。

まあ、まだ若いのだから腹芸は苦手なのかもしれない。

そんな事をつらつらと考えながら、イーリスは同席する二人に視線を走らせる。

王子はつまらなそうな顔をしており、逆にファミルスは苛立った顔をしている。

それはそうだろう。自分だって望んできているわけではないのに、相手側から「お前なんかいらない」と言われたに等しいのだ。

武人氣質なファミルスが怒るのも当然である。

もっとも、イーリスはその感情すらも利用するが。

「……そうですか。ならば殿下、私も言わせて頂きますが、私は殿下の正妃等というモノに興味はありません。二か月先とは言わず、明日にでも——」

「あら、ファミルス様は敵前逃亡をなさるつもりなんですか？」

「——なんだって！？ も、もう一度言ってみろ！」

ファミルスの言葉に割って入る。

せっかく直していた丁寧語をかなぐり捨てて眦上げて怒鳴る様子に、上手くいったと内心でため息。

何故割って入ったか。

あのまま話が進むと、明らかに不味い展開に入るのが目に見えているからだ。

ここでファミルスを返すと言う展開になってしまえば、例外が認

められてしまった事になる。

つまり王子が候補者全員を追い返す口実になる可能性が出てくるのだ。

イーリスとしては構わない。

そもそも早く実家に帰りたいと言うのが本音だ。

だが。

今回王子の正妃が決まらなければ、また同じような事が起こる可能性がある。

そしてその時、今回王子に選ばれなかった事を恨んで他国の資格になる令嬢が出てこないと、どうしても言えようか。

今回は集められたのも急であったし、他国へ伝える余裕もなかっただろう。

だが人の口に戸が立てられないとも言出し、確実に王子が正妃候補として集められた令嬢たちを冷酷にも相手にせず追い返したという話は他国に伝わるだろう。

それを好機と思う国も出てくるかもしれない。

酷い対応をされた令嬢を操り、王子を無きものにしようとするかもしれない。

そう言った事態が起きた時、対処に当たるのは十中八九イーリス達カミジール家だ。

正直、面倒くさい。

今のイーリスからすれば、この王子に対してそこまでする義理を感じられない。

そんな魅力がある人物には見えないし、あくまで今後に期待、というレベルなのである。

だから、是非とも今回の正妃選り伴侶を決めてもらいたいのだ。

そうすれば、再び不特定なうら若い令嬢たちを集めたりする必要が無くなるのだから。

瞬時のそんな思考を廻しながら、別の場所でこの後どういう風に会話を持っていくかを考える。

此方を睨みつけるファミルスと、そんなファミルスを少しでも興味深そうに見る王子。

それを確認すると、一拍置いてイーリスはしゃべりだす。

もちろん、嫌みで高圧的な女を演じながら、だ。

自己紹介（後書き）

というわけで、ライベル令嬢の一人が初登場。ボーイッシュな騎士っ娘ちゃんですね。

イーリスはいい感じで悪女をやってます。まあ、色々突っ込みどころはあると思いますが、どうぞ温かい目で見つつ、容赦なく詰ってください。喜びます（マゾか

ちなみに三話で語っていた間諜についてですが、ほとんど創作です。ただ使っていた術に関して言えば、本当に過去の忍者が使っていたものだったりします。

資料では、ですけれども。

詳しくは、落第忍者乱太郎とかを読んでみればいかと！ 私、あれの大ファンです。

きり丸×トモミちゃんは正義ですよね……？

戦略遊戯（前書き）

第五話の投稿です。今回も少し短めですが、ご容赦ください。

そしてふと気になったのですが、携帯で読まれてる方だとうやうや文章詰めて書いてると読みづらかったりするのでしょうか。

今まで携帯で小説家になろうのSSを読んだ事がないので何とも言えないのですが。

もし読みづらいようでしたら行間を空けるなどの手段をとりますので、ご一報お願いします。

戦略遊戯

「もう一度と言わず、何度でも申し上げますわ？ ファミルス様は、敵前逃亡を成されるのですか？」

「な、何だと……っ！ 貴女は、私を侮辱するのか！？ 一体どこに敵前逃亡などという表現が出てくる要素があった！」

「あらあら、顔が真っ赤になっていきますわよ？ はしたない。少し冷静になられたらいかがですか？ 殿下の御前ですよ？」

「うるさいっ！ 答えろっ！」

いい感じにヒートアップしていく。

此方が意図しているのはそうなのだが、やはり敵前逃亡という言葉は効いたようだ。

剣術に傾倒しているから、名誉を重んじるタイプだとは思っていたが。

「答えを聞かなければわからないとは、本当に血のめぐりが悪いのですね？ ファミルス様は。こんな事、少し考えれば分かる事でしように。ふふふ、よほど教養が無い育ち方を成されたのですね？」

「き、貴様……っ！」

立ち上がり、齒をギリギリと食いしばって怒りに燃えた相貌を真っ直ぐ向けてくる。

今にも飛びかかってくるように感じる程だ。

怒りに燃える顔は、元々シャープで鋭い造形だったのも合わせ、激しい感情が似合う美貌になっていた。

それを見て、王子が感心したような息を吐く。

ファミルスは、感情を激しく燃え上がらせた方が映えて美しいと、そう認識しているようだ。

「怖いすわね、ファミルス様は。ふふふ、凶星を指されましたか？ まあ、ともかく、分かっているらしいやらない浅学無才なファミルス様に態々説明して差し上げましょう。感謝してくださいね？」

そろそろやめておこう。

本気で、怖い。

「簡単な事。この場合敵というのは私であり、殿下ですわ。今回の正妃選びは、集められた女同士の戦いであると同時に、殿下という素晴らしい殿方に自分という武器を届かせる為の戦い」

説明が始まる前まではイーリスを眼中に置いていなかったレンフイールドが、少々感心した風な顔を向けてくる。

このままでは少し不味いか、などと考えながら、説明後に自分を落す為の言葉を考えていく。

「だと言うのに、ファミルス様は私という目の前の敵はおろか、まだまみえていない六人の敵に背を向け、陛下を振り向かせる自信が無いと尻尾を巻いて逃げだそうとしているのでしょうか？ これを敵前逃亡と言わず、何と言うのですか？」

「わ、私は、別に逃げようなど――」

「あらあら、先ほどおっしゃったばかりではないですか、ご自分で正妃に興味は無い、と。興味が無いと言い訳して、逃げるおつもりだったのでしょうか？」

「違うっ！ 逃げなどしないっ！ 断じて正妃に選ばれる自身が無いわけでも、貴様たちに劣っているから逃げるのでもないっ！」

「ならば、残られるのですね？ この戦いに。勝利する気を持って」

「無論だっ！ 私に、逃げるなどという言葉は無い！」

「そうですか。ふふふ、良かったですわね？ 殿下。先ほど見惚れていた美貌の持ち主が、殿下を籠絡するために全力を尽くすと宣言いたしましたわ？」

「……っ！」

上手くいった。

これで、ファミルスは王子の正妃となる為に全力を尽くすだろう。良くも悪くも自分の言葉に責任を持つ女性である。

恋愛面が上手いとは思えないが、その不器用さが王子の心を捉える可能性もあるのだから、しっかり本気になってももらわないと困る。

「……解せないな」

女二人の修羅場を観察していた王子が、ぽつりと零す。

その視線の先にいるのはイーリスだ。

「何故、ファミルスを焚き付けるような事をする？ お前は私の正妃を狙っているのだろうか？ ライバルが減るのは喜ぶべきことではないのか？」

思ったより鋭い。

とはいえ、これは気づかれても問題ない疑問だ。

もちろん、前に述べている本当の事情は説明しない。

あたりまえだ。

だから代わりに、今自分が演じているキャラクターが言いそうなセリフを選んで言う。

「ふふ、殿下。畏れながらお答えいたしますわ。それは、勿論ライバルがいた方が、私が正妃になるまでの過程を楽しめるからですわ」

「……過程を？　そして、お前が正妃になるのは決定事項か？」
「ふふ、当たり前ではありませんか。殿下の寵愛を頂くのは、私一人で十分ですし、その自身もありますわ。ただ、せっかくこうして見目麗しい様々な令嬢がいらっしゃるのです。その令嬢たちが必死で殿下の寵愛を頂こうとする中、優雅にその座を得た時は、いかほどに達成感と充足感がある事でしょう」

言葉を紡ぎながら、頭の中では別の事を考えていく。

この後、どうするかだ。

自信に満ちたイーリスの言葉を聞いて、本来の予定であれば高慢だと蔑むか冷ややかな視線を送ってくる予定だった王子が、妙に感心した視線を向けてきているのだ。

それはファミルスも同様だ。

怒りの切っ先を殺がれたのか、少し拍子抜けしたような感じはあるが、それでもイーリスの言葉に感心したような顔で椅子に座りなおしている。

マズイ。

ファミルスを焚きつける代わりに、自分にも興味をもたれたかもしれない。

齒に衣着せない物言いに高慢さを混ぜ合わせた演技をしていたが、まだ足りなかっただろうか。

「先にも言いましたが、私の趣味は戦略遊戯ですわ。遊戯だけではなく、恋の戦略も……他の令嬢たちに負けるつもりはありません。それは後々お分かりになる事ですわ」

「私がお前の虜になって、か？」

「はい、勿論」

「ふん、自信满满だな……。その鼻、へし折りたくなってきた」
「……え？」

へし折りたくなつた？

興味を持ったと言うよりは、鼻もちならなくて叩き潰そうとしてきている？

王子の顔は無表情。見下したような視線を浮かべて入るが、強い感情はうかがえない。

今一掴めないが、これはこれでチャンスかもしれない。
自分の株を落しつつ、王子の素質を測るのには。

「ファミルス。お前も、戦略遊戯は出来ると先ほど言っていたな？」
「え？ は、はい。確かに出来ますが……。それが？」

「ならば話は早い。私とファミルス、イーリスの三人で戦略遊戯を行い、その優劣を示そうではないか」

「二面戦略で勝負を行う、という事ですわね？」

望む方に話が転がり出した。

三人で、三つ巴の戦略遊戯。

戦略遊戯は一对一だけではなく、少人数であれば複数でも遊べるゲームだ。

ルールは簡単で、歩兵、工作兵、騎兵、弓兵、盾兵、魔法使い、將軍、英雄、王の駒を使い、何種類かの地図を模した戦場で争うのだ。

戦場には枡目が引かれており、その枡の上で各駒を決められた法則の動きで動かしていく。自分のターンで相手の駒のいる枡に自身の駒を進めれば、相手の駒を倒した事になる。

最終的に、王が倒された方が負けだ。

また地図に描かれた地形などで駒の動き方が変わるなど、奥が深いゲームとなっている。

今回は大きめの戦場を使い、レンフィールド、ファミルス、イーリスがそれぞれ駒を展開。二面戦略で戦いを繰り広げる、というものだ。

王以外の駒の数は、一対一で行う時の倍となる。

対戦者同士で組み、一人の相手を徹底して叩いたり、色々幅の広い遊び方が出来る、まさに戦略を競うゲームなのだ。

「……カイル、三人分の駒と、戦場を持ってこい。出来るだけでかいフィールドの物をな」

一礼して了解の意を示し、カイルが部屋から出ていく。

それを見送りながら、王子は侍女にテーブルの上を片付けさせる。

「……ふふ、殿下には悪いですけども、私は相当強いですわよ？
実家では負けなしなのです」

「ふん、それは周りから手加減されてただけだろう？ どうせ。戦いも知らないお嬢様がどれほど出来るのか、見せてもらおうじゃないか」

「あらあら、ファミルス様？ 殿下の御前ですよ？ 言葉遣いが乱れてらっしゃいますが、よろしいんですか？」

「……っ！ も、申し訳ありません、殿下」

「構わない。楽に話せ。変に畏まらなくていい。素のお前を見せろ、ファミルス」

「……はっ」

「ああ、其方のほうがいい。先ほどまでのお前は、美しかった。意志の強い娘は好みではなかったが、お前のようなタイプならばそばに置いてもいいかもしれないな」

ずいぶんとファミルスの事が気にいったようである。

何より何より。

手早く戦略遊戲の準備を整えて戻ってきたカイルが、どこか気易そうな雰囲気を出し合っている兩名を見て安堵の表情を浮かべたのが印象的だった。

ちなみにイーリスは、その様子を気にも留めない風で観察していた。

先ほど余裕で勝つ、とでも言うような発言をしてしまった手前、今の状況にも積極的に打って出る事が出来ないからだ。

しかしあくまで気にしてない風を装っている、という事を見せるために、手にしたティーカップを少し乱暴に置いてみたり、無駄に視線をさまよわせたり、イライラしている様子を演じていく。

これでいい。

「準備が整ったようだな。では陣を張る位置を決め——始めようか」

そうして、戦略遊戲が始まった。

夜。

自室に引き上げたレンフィールドは、寝酒の蒸留酒を飲みながら昼間の出来事を思い返していた。

結局、戦略遊戲ではレンフィールドが他の二人を下す結果になった。

順位としては、レンフィールド、ファミルス、イーリスとなる。

イーリスは大言壮語をしたにもかかわらず、レンフィールドはるかファミルスにも勝利できなかった。

それも惜敗などではなく、惨敗だ。

如何に、実家で甘やかされて育ったのかが分かるような流れだった。

最初は良かったのだ、最初は。

最初の十手くらいまでは、自分ともファミルスとも互角の戦いを繰り広げていた。

ちなみに今回は、それぞれ駒を半分ずつ使つての完全二面作戦が展開された。

協力して一人を叩くプレイはしなかったのだ。
だいたい十五手目くらいから、イーリスの指す手がおかしくなってきた。

意味が分からない手を、どんどんしていくのだ。
よくこれで、勝てたものだと思う。

間違はなく、実家で勝負した相手は手加減をしていたのだろう。
それで調子に乗った結果が、惨敗。

完膚なきまでの惨敗だった。

最終的に駒が全て奪われ、王は丸裸。

あまりにも哀れだったので、先にファミルスとの勝負に蹴りを付けたが、あれはどう考えてもイーリスが最下位だ。

あまりにショックだったのか、イーリスは顔を蒼白にした後、泣きだした。

化粧が崩れて酷い事になっていたのを思い出す。

茶会はまだ終わっていないと言うのに足早にその場を去り、残された侍女が平身低頭した後で追いかけて行った。

後で候補者の周りに放っている間諜の一人からその後のイーリスの状況を聞くと、ヒステリーを起こして侍女に辛く当たっていたらしい。

愚かだ。

戦略遊戯を始める前の、見事な啖呵。

自信にあふれた姿には少し思う所もあったが、あれではどうしようもない。

やはり、二ヶ月後にあれは切るようにしよう。

「それにしても……キースはどうしてまた、あんなのを気にかけたんだか」

化粧は濃すぎるし、衣装はド派手。プライドも高く、高慢で他者を見下している。

顔の造詣も他の令嬢に比べれば劣っており、そのくせレンフィールドを狙う目だけはギラギラと輝いていた。

「あれに比べると、ファミルスは雲泥の差だったな……」

ファミルスとの戦略遊戯は、楽しかった。

実直な手を指してきて、スパSPAと切りこんでくる調子には素直に好感が持てた。

イーリスが去った後もしばらくは会話を楽しんでいたが、それがまた楽しかった。

しゃべり方も自分が許してからはフランクなものになり、狩りや剣術が趣味という事もあり、其方の話でも盛り上がったものだ。

最も、ファミルスの背後に控えていたカイルの表情は始終青かったが。

確かに普通であれば不敬に問うが、あれほどあのしゃべり方が似合っているのならば問題は無い。

正直、気に入った。

あれとならば、今後共に過ごす事になっても問題は無いかもしれないと、そう思えてしまうほどに。

怒った時の凛々しい顔や、狼狽した時の少女のような顔。

他にももつと色々な面があれば見てみたいと、正直そう思った。向こうからすれば、それは望まない事なのかもしれないが。

「まあ、まだ二カ月あるからな……じっくり考えるか」

それにしても面白いものだ。

最後の茶会まで意地でも嫁など取る気が無かったのが、今では一人考えてもいくらいには変わっている。

何故だろうか？

「ふうむ……不思議なものだな」

くい、と蒸留酒を煽る。

明日も、今日とは違った組み合わせで茶会がある。

あれほど恥をかいたイーリスがどのような顔をして出てくるのかを楽しみにしつつ、レンフィールドは寝る準備を始めたのであった。

戦略遊戯（後書き）

というわけで第五話でした。お付き合いありがとうございます。

作中で出てきた戦略遊戯ですが、完全に作者の創作です。でもまあ、モデルにしているのは将棋ですね。将棋。

地図を使った将棋とでも思っておいてください。チェスでも可。でも私、チェスのルール知らないんですけどね。

それでは、また明日も更新できればいいなと思いつつ、是にて失礼します。

疑惑の中で会議は踊る（前書き）

さて、第六話です。

そろそろストックがなくなりつつあり、ちびちび書き進めているところ。

連続更新を毎日できるようにするためには……分量を減らすしかないかなあ、と少し思ってます。

さて、それではお楽しみくださいませ。

疑惑の中で会議は踊る

どうにも違和感がある。

正面で資料を見ながら和やかに自分の意見を出しているレンフィールドの姿を見ながら、キースは納得のいかない感情に眉をしかめた。

正妃候補との交流が始まってから、すでに十日。

全ての組み合わせでお茶会が済んでおり、今日は誰を二ヶ月後に残すのかを決める一度目の話し合いを行っている所だった。

この場にいるのは、近衛騎士として全てのお茶会に参加し、なおかつ妹が正妃候補に入っているカイル、同じく全てのお茶会に参加していたキース、宰相のミゲールに、第二王子のリンズミート、当人であるレンフィールドの五人。

リンズミートはお茶会が一巡し終わった次の日に行われたパーティーで、候補者全員とあっている為、この場に呼ばれた。

ミゲールは宰相として全ての候補者の資料を集めた当人である為、ここにいます。

今は二ヶ月後に残す候補者の候補を決め終え、残った四名の中で誰が一番王妃に遠いか、という話題になっていた。

ちなみに、満場一致で残るメンバーに選ばれたのは、以下の四人です。

まず、カイルの妹である、ファミルス・シク・シレット。

お茶会初日で大分レンフィールドと打ちとけたのか、その後のお茶会でも始終和やかに会話を行っていた。

機会があれば剣を交えよう、などという話も出ていたのを覚えている。

次に、シーグレット・ルフーナ元帥の娘である、シーリン・イフ・ルフーナ。

控えめながら肝心なところでは芯が通っており、大人しそうな外見を裏切るような強い発言を時々していたのが印象的だ。

特にその印象が強いのはがお茶会二日目のイーリス・ミル・カミジールと一緒に席になった時の事。

控えめなシーリンを嗤いながら見下し、馬鹿にした発言を繰り返すイーリスを、

「何も知らない貴女にそのような事を言われる所以はありませんし、また貴女がそのような振舞いをする事で悪印象を持たれてしまう方々がいる事を考えてはどうでしょうか？」

と真っ向から両断したのを覚えている。

それに王子が追従してイーリスをけなしたものだから、彼女は二日連続でお茶会を途中で辞退する事になった。

次は、この場にいるミゲール宰相の娘である、アイリス・フォン・ラトナビュラ。

たいそうな本好きで、今回の話にも乗り気ではなかったが王城にある雑多な本を読んで過ごして構わないと許可が出たために訪れたらしい。

彼女で印象に残っているのは三日目。またも、イーリスと共に参加していた時のことだ。

話の流れでこの国の歴史が話題となり、学がある所を見せようとしたのか得意げにしゃべっていたイーリスを話をぶったぎり、間違ったか所を懇切丁寧に修正し、さらにイーリスが語ったのよりもよ

り深く、そして面白い話口で歴史を語って見せたものだから、イリスはその後ずっといたたまれなさそうに小さくなっていた。

王子は分かりやすい語りのアイリスを気に入り、その後のお茶会でも歴史の話を聞いたりしていた。

下手な学者よりよほど歴史に詳しかったのを覚えている。

最後は、ハインリヒ参謀長の娘である、ミルフィア・ハル・セーイロン。

優秀な魔法使いであり、研究者でもある彼女もまた、アイリスと同じように王城に保管されている様々な魔道書を閲覧するために候補に入った。

最初から王子には全く興味が無いそぶりを見せていたが、お茶会四日目。またもイリスと一緒にその態度は一変する事になる。レンフィールド王子は、あまり知られていないがとても優秀な魔法の研究者だ。

自身は魔法が使えないが、精霊の特性等に関する研究を行っており、その分野では専門家でさえ舌を巻くような知識を持っている。

茶会の最中ひょんなことから精霊に付いての話になり、そこからは一気に専門的な会話が繰り広げられていった。

王子もミルフィアもディープな話題を展開する相手に飢えていたのか、専門用語を出して熱く議論が続けている。

それを呆けて見ていたイリスは、最終的に自分が完全に無視されている事に気がついてその場を後にした。

ミルフィアは深い話が出来るレンフィールドをとてども気に入る、庫の相手と一緒にになれるのならば、と正妃を目指す意志を強く固めたとか。

ちなみに、今挙げた四人はそれぞれ仲がいい。

元々大半が正妃に興味が無かった事もあり、特にいがみ合う事も無く良好な関係を築いている。

問題は、残りの四人。

イーリス・ミルカミジール、レイセリア・アク・カーングラム、ジャネット・シス・シッキム、セーラ・イフ・アルグレイイスである。

イーリスの親は特に要職に付いていないが、残りの三人の親はそれぞれ農業や林業を司る農林大臣、国の財政を管轄する財務大臣、外交を務める外務大臣である。

この四人は先に挙げた四人とは異なり、徹底的に己の評価を自身で落していた。

四人はとにかく、仲が悪い。

特にイーリスが不和の原因になる事が多く、イーリスと他の三人が一緒になったお茶会は、全てが予定時間より大幅に時間を早めて終了している。

早いものでは、王子が一杯紅茶を飲んだだけで帰ったという事もあった。

そして異常の事を踏まえ――やはり違和感が付きまとう。

イーリスに関して、気味が悪い程に違和感が沸いてくるのだ。

何故、彼女が二ヶ月後に残す候補達と一緒にのお茶会に参加した時に、王子と候補者たちの仲が良くなるのか。

何故、最初から王子が残すと決めていた四人が測ったかのように王子との仲を深めるのか。

何故、彼女が切り捨てる候補者たちと一緒にの茶会に参加すると、双方の株が落ちるような出来事になるのか。

彼女の行動を見ればそうなって当たり前なのだが、予定調和に見えすぎて違和感が止まらない。

「俺は、何と言ってもこのカミジール家の三女が最悪だと思う」

王子のその言葉で、キースは己の思索から意識を戻す。

一番王妃から遠い候補として、最悪という表現まで使う王子。

「そうだね、兄上。確かにカミジール嬢は少々悪目立ちが過ぎたかな？」

一度あっただけのリンズミートも、そう評する。

「カミジール男爵はとてもいい人なのですが……。ある意味異端、という事なのでしょうか」

ふかぶかのため息を吐きながら、ミゲール宰相もイーリスの名を上げる。

だが。

「……どうした、二人とも。面白い顔になっているが」

カイルとキースだけが、その意見に賛同しなかった。

二人はどうしようもなく、このイーリスという少女に違和感を感じていたのである。

「キースとも話し合ったのですが……」

「イーリス様は、本当にあれが真実の姿なのでしょうか？」

「……どういう事だ、キース、カイル」

渋面を作ったキース達の言葉に、不思議そうにするレンフィード。

「私たちにはどうしても、お茶会で見たイーリス様の言動が作られた、作弄的なものに見えてしまうのです、王子」

目線だけで二人が達した結論を伝えるかどうかを確認し合い、同

意を得たうえでキースは話し出した。

お茶会初日から昨日のパーティーに至るまでの、イーリスの行動に付いて気になる部分を。

この場にいる自分たち以外の面々に感じていた違和感を話すキースとカイル。

その二人の推論を聞いて、ミゲールは内面だけで深いため息をついた。

キース達が挙げたイーリスの言動に付いて気になる部分というのは、どれもこれもイーリスが王子と、二ヶ月後に残す候補者たちの仲を良くするために仕掛けた部分ばかりだからだ。

「今も述べたとおり、お茶会初日の戦略遊戯に付いても、三日目の歴史に関する間違いに付いても、四日目の魔法に付いても。それらの切っ掛けを作ったのは、全てイーリス様なのです」

ある種の覚悟を決めたような顔でキースがイーリスに対しての違和感を上げていく。

今回のミスは、おそらくイーリスが騙す対象をレンフィールドと自分以外の正妃候補、そしてリンスミートに限定していたからだろう。

限定していたと言うか、其方に細心の注意を持っていったというか。

とはいえ、他に対しての気配りが御座りになっていたというわけではない。

その証拠に、キースとカイル以外の近衛騎士たちは全員イーリスに対して悪感情を持っていたし、侍女たちも同様だ。

もつとも、それはイーリスだけではなくイーリスが連れてきた侍女のアイリス、そしてこの王城に入りこんでいる数多のカミジール家に所属する間諜たちの手に因る所が大きいだろう。

その数は王城の誰もが知らないし、誰がそうなのかもわからない。王都や各貴族の領地。その全てにカミジール家は手を伸ばしていると言われているが、その実態は誰も知らないのだ。

知っているのは、おそらくカミジール家の人間のみ。

あるいは、カミジール家ですらその全容を把握しきれていないかもしれない。

それはともかくとして。

問題なのは、今こうしてイーリスの事に気づきかけている二人だ。二人の話す内容に、感じる所があるのか二人の王子は頷いてはいるが、しかしその表情は疑念で一杯だ。

無論、ミゲールも疑わしげな表情は作っている。

王子たちに根付けられた悪感情は、忠臣の――そして異母弟からの言葉でもぬぐい去れはしない。

本当に、たったの八日間でイーリスは上手くやったものである。

だが、近衛騎士二人はそうではない。

確かにイーリスに悪感情を抱く場面は何度も見てきたが、それでも自分を中心ではない傍観者の立場だったからこそ、彼女が仕掛けていた心情操作を違和感として受け止める事が出来たのだろう。

こうして自分や王子たちから懐疑の視線を遠慮なくぶつけられてもその表情に一片の曇りもないことから、イーリスが怪しいという事に相当の自信を持っていると思われる。

非常に厄介だ。

なまじ、手を出す事が出来ないから厄介すぎる。

「しかしだな、キース、カイル。それらとて、やはり偶然と言える範囲の事だろう？ アレが意図してそんな事をしたとでも？ ばかばかしい。田舎貴族の娘が、そんな事をしてくるわけもなからう。」

あれは素だ、どう考えても。それに、何のメリットがあると言うんだ、いったい」

「兄上の言うとおりでと思うよ、二人とも。そんな事をしても得るものは何もないでしょう？ 実家の男爵家にも迷惑がかかるんだし。カミジール嬢は権力と地位に目がくらんでる、傲慢で、配慮が欠けてる人だと思う。」

「しかし……っ！」

「あーあー、いい。分かった。そんなに言うなら、次の茶会の中でそれとなく探りを入れてみるさ」

「次からは二人きりになるのですよ……！？ 万が一が起こっては遅いのです！」 「問題ない、カイル。二人とはいえ、一応護衛は身近にいるわけだからな。それに、女に俺が負けるとでも思っているのか？」

「……………っ！」

まずい。

何がまずいと言えば、キース達の中でイーリスが王子を害そうとしているという観念が固まりつつあることだ。

自分たちは明確にそうだと気づいているのに、王子たちはまったく危機感を持っていない。

この状況がこのまま進んでいけば――下手をすると、近衛騎士たちが先走りイーリスを害するかもしれない。

もしそんな事になれば、この国は他ならぬカミジール家によって滅亡する可能性がある。

それほどまでに、カミジール家はこの国の暗部に浸透しすぎている。

これは、少し口を出す必要がある。

そう判断し、今後の展開、そしてイーリスに行う説明の内容を考えながら、ミゲールは熱くなり始めている場に一石を投じる。

「キース君もカイル君も落ち着きなさい」

「しかし、ミゲール様っ!」

「落ち着きなさい、と言っているのですよ、カイル君。感情に任せて発言し行動しても状況が好転するとは限らないのですが」

むしろ悪化する可能性の方が高いが、それは言わないでおく。

「二人は、イーリス様が殿下を害する刺客であるかもしれない、とお考えなのですね? そうでなかったとしても、胸の内に何か秘めるものがある、と」

「え、ええ。私もカイルも、それで一致しています。イーリス様の行動は腑に落ちないのです、どうしても」

「そうですか……。殿下」

「何だ、ミゲール」

「私めに腹案がございます。お聞き入れますでしょうか?」

「まずは話せ。それから判断する」

「御意に。キース君もカイル君も、イーリス様を疑っています。ならばいっその事、彼女の監視を命じてはいかがでしょうか」

「監視を? この二人を、イーリスに付けるというのか?」

「ええ。監視と表だって言う問題がありますので、開くまで護衛という事で。二人はその護衛の中で、直接イーリス様に真意を問いただすなり、行動を見て判断を行うなりしてもらうのです。無論、彼女だけ特別扱いとなるとまた火種になりかねないので、他の候補者たちにも二名ずつ護衛を付ける必要がありますが」

そうすれば、対処をイーリスに任せる事が出来る。

無論近衛騎士団でも身分の高い二人をイーリスに付けるため、他の令嬢たちにも同格か近い格の者を付ける必要があるだろうが、このまま放置するよりは其方のほうがいい。

場合によっては、護衛する騎士を順に入れかえる等もする必要があります

あるが、当面イーリスにこの二人を任せれば何とかしてくれると思う。

二十以上も年の離れた子供に何を期待しているのだと言う話にはなるが、しかしイーリスはカミジール男爵が『要』と評したほどの者だ。

騎士たちが接触する前に上手く連絡を取れば、悪いようにはしないだろう。

恐らく、だが。

「ふむ……ではそうしようか。キース、カイル」

「はっ」

「はっ」

「お前たち二人を、イーリスの護衛に付ける。やり方は任せるので、イーリスの真意を計れ。また他の候補に付ける護衛を選出し、リストをミゲールに提出するように」

「御意」

「御意に」

「ミゲール」

「はい」

「提出されたリスト、およびキース、カイルの両名からイーリスについての報告を受け、候補として残すか即刻家元に帰すかの判断を行え。帰す場合には俺が直接陛下に話す故、先に報告するように」

「御意にございます」

「護衛の件は、俺とミゲールで陛下に伝える。キースとカイルは早速イーリスの下に向かい護衛となる旨を伝えるように」

分かりました、と頭を垂れるキースとカイル。

こうして見ると、やはりレンフィールドには王の風格が備わり始めている。

直す所と言えば、やや他人を軽んじる所がある部分と、私事に干

渉される事を嫌う点、そしてそれらの欠点を埋め、支える伴侶を得ることだ。

様々な事情があるとはいえ、能力の面では正直イーリスが王太子妃になってももらいたいと思う。

彼女が先の王妃になれば、この国はより盤石になるのだから。

しかし、イーリスも、カミジール男爵もそれは望まないだろう。

『我らは貴方の一族に手を貸そう。その見返りとして望むのは、平和な日常と、その日常を護ってるのだと言う誇りのみ。それ以上は望まないし受け取らない』

それは、初代カミジール男爵が時の王に告げた言葉だ。

その言葉通り、初代カミジール男爵は平和な日常を築ける場所を得、その場所が周囲の国に続く街道を持つ土地であり、国の防衛を担っていると言う事で日常を護るという誇りを得続けている。

しかし、それ以上は望まないし、受け取らない。

以降の世で何度か男爵から子爵、あるいは伯爵まで爵位を上げようという話が持ち上がったのだが、その度にカミジール家は辞退し続けている。

それが、初代の盟約だから、と。

故に、恐らく今回の皇太子妃選びも、カミジール家が用いるありとあらゆる手を使って逃れようとしてくるだろう。

別に、それは構わない。

その見返りとして、アークジュエル王国は護られているという面があるのだから。

だが、願わくば――。

「では、行け。二人とも」

御意、と言葉を残し退出する二人の騎士。

それを見送り、ミゲールも席を立つ。

「では殿下。まず陛下に報告をしまいたします。先にある程度事象を話しておきますので、殿下は後からいらしてください。少々、陛下と内密に話したい事もございますので」

「わかった。では頼むぞ、ミゲール」

「御意にございます」

立ち上がり、一礼。

部屋を後にしたミゲールは、さっそく身近な間諜を呼びよせ、イリスに急ぎ繋ぎを取るように伝える。

これから忙しくなる。

そんな事を考えながら、心持早足で王の執務室へと向かうのであった。

疑惑の中で会議は踊る（後書き）

というわけで、第六話でした。

今回は騎士たちが抱いた疑惑について、会議で語るという。
ちなみにこの場にも、きちんとイーリスの手の者はある……という
設定です。

表には出ないのが忍なのです。

さて、次は第七話。まだ執筆が終わってないので、明日更新できる
ように頑張って書くのです。

それでは、読んでいただきありがとうございました。

糾弾を止めるは従者の刃（前書き）

というわけで、第七話です。

今回も少し短めですが、ご容赦ください。

それにしてもストックは残すところ一話分。

このまま執筆しなければ明後日載せる分がなくなるので、これから必死に執筆です。

がんばるぞ、おー

糾弾を止めるは従者の刃

「……なるほど、それで、私の所へいらっしゃったわけですね？」
「ええ。我ら二人は、これより貴方の護衛となります。不都合などあれば、お申し付けください」

可能な限り便宜を図りますので。

そう言いながら頭を下げる二人の騎士。

表向きは丁寧な礼をしているが、そのくせ目だけは油断せず此方の事を観察してきていた。

一人で今後の事を考えている最中、宰相の鳩から連絡があった。
内容を要約すると、

『茶会に参加していた近衛騎士二人がイーリス様の事を疑っています。此方では手の出しようがないため、申し訳ありませんがイーリス様のご裁量で判断をお願いします』

との事。

無論内容はどうしてそうなったのかを簡潔に書いてあるもつと長いものだが。

その情報でどうしてこうなっているのかは理解しているが、それでもイーリスはため息をつかずにはいられなかった。

たとえばそれが、自分のミスが発端だったとしても。いや——発端だからこそ。

「……………どうしたものかな」

口の中で、二人に聞こえないように呟く。

現在、部屋の中には自分と押しかけて来た騎士二人だけ。

アイリスは、様々な情報を受け取りに城内を歩きまわっている最中だ。

突然の来訪だったため、化粧以外に服を整える暇が無かった。

無論外で待たせてもよかったのだが、現在来ている服も万が一を考えて部屋着にしては派手なものを選んでいたので問題が無いと言えないのだが。

だがこの二人が持つ“イーリス像”を破壊する為には、是非とも部屋でもド派手な服を着ている所を見せたかった。

アイリスがいてくれれば、それも出来たのだが。

ともかく、今回は今まで通り道化で乗り切り、今後の方向性としては駆け引きで何とかする事になる。

というか、それ以外にどうしろというのだろうか。

とりあえずアイリスが帰ってきたらこの二人を帰し、二人で密談するしかない。

前途多難だ。

「わかりました。まあ、さしあたっては特になにもありませんが、そうですね……お茶でも入れてくださる？」

「なっ……それは、侍女の仕事では」

「その侍女がいないから言っているのよ？ それくらい言われなくても理解してもらいたいものね、近衛騎士などという高い身分にいるのだから。それに、誰も貴方たちに入れろとは言っていないわ。今あなたが言った通り侍女を連れてくればいいでしょう？」

まったく使えないわ、と頭を嫌みに振りながら繋げる。

それだけでむっとした顔をするのだから、割と簡単にいきそうではある。

だが、油断は禁物だ。

この二人の詳細な情報はまだ得ていないから、迂闊に判断はできない。

好む人物像、好まない人物像、言動、行動、過去の情報、人付き合いなど、他人を攻略するための情報は多くなければいけない。

これを、略本の術という。

また集めた雑多な情報を分析し、正しい状況を導き出す事を節を揃えると言い、現状キースとカイルに関しては節が揃っていないのだ。

無論、王子、そして正妃候補の関係者という事で最低限の情報は手に入れてある。

だがそれは感情を操作するには足りない情報なのだ。

ある程度、一般的に嫌われるような行動を取っておけば間違いないのだろうが、しかし彼らに根づいた感情まではぬぐい去りきれないだろう。

「……わかりました。それでは、私が侍女を連れてきますので、申し訳ありませんが少々お待ちください」

頭を軽く下げ、カイルが部屋を出ていく。

部屋の中にはキースとイーリスのみ。

すれ違いざまに騎士二人が視線で会話をしているのを見取った為、さて何がどうなるか、と心構えを新たにする。

「……所で、イーリス様。少しお伺いしたい事があるのですが、よろしいでしょうか？」

来た。

気を引き締めつつ、演技か崩れないように意識しながら言葉を紡ぐ。

「なんででしょうか？」

「イーリス様は思い出したいかもしれないかもしれませんが……茶会初日の、カイルの妹と行った戦略遊戯についてです」

「……ええ、思い出したくありませんわ。悪いけれど、その話はやめて頂戴」

「……あの勝負、何故イーリス様は意図して負けられたのでしょうか？」

一瞬、演技が崩れるかと思った。

それくらい、その言葉は衝撃的だった。

そこか。

そこから、気づかれたのか。

「……何を言っているのか分かりませんが、私がわざと殿下と、そしてファミルス様に負けたと？ 何を根拠に？ それは、敗北し泣きわめいてあの場を後にした私への嫌みですか？ 貴方は、護衛のくせに護衛対象の印象を悪くするのが目的なのかしら」

ふるふると、怒りに震える演技をしながら、低い声で相手を糾弾する。

これはマズイ。

確かにあの茶会だけは、記録に残せる方法で仕掛けていた。

戦略遊戯はその勝負の検証を後で行うために、全ての流れを記録するのが習わしだ。

当然、イーリス達の勝負も全て記録が残っている。

しかし。

あそこで行っていた小細工は、そうそう看破されるものではないはずなのだが――。

「ファミルス様相手の十手目と十五手目、そしてレンフィールド殿下への十五手目と二十手目、ファミルス様への二十手目と二十五手目、殿下への二十五手目と三十手目、ファミルス様への四十二手目と四十四手目、殿下への五十手目と五十二手目、フェミルス様への五十四手目と五十六手目、殿下への五十九手目と六十一手目——」

戦慄する。

キースが羅列したその手は、全てイーリスが王子やファミルスの腕前を見るために技と奇抜な手を打った部分だからだ。

あの時の戦略遊戯、最初の十手目までは堅実に行っていた。それぞれの、力量を確かめたためだ。

そして、ファミルスを相手にしての十手目。丁度いい手があったので、その手から四十手先までに有効な対処を行わなければ致命傷となる手を打った。

最も、相手が気づかなかったので五手目にはそれを崩す悪手を打った。

王子へも、十五手目に同様の手を打ち、さらにその五手後で崩した。

キースが挙げたのは、此方が仕掛け、そして崩した手の場所だ。

最初は四十手先、次は三十手先、次は二十五手先、次は二十手先。その後も挙げられた場所は、全て仕掛け、崩した手の場所だった。完全に、気づかれている。

これは——どうしたのだろうか。

宰相からの情報でも、先ほどの会議ではこの話題は出さなかったのは確認済みだ。

無論、男爵の娘程度が王子の戦略眼を確かめるためにそんな駆け引きを行っていたと知られれば大問題だからだろう。

そして、イーリスに対する切り札になりえるからだ。

最も、それを最初に切ってくるあたり、キースは間諜に向かないな、と思うが。

「以上が、私、カイル、そしてハインリヒ参謀長、シーグレット元帥、ダミル大将で検証した結果、イーリス様が殿下とファミルス様を図るために行った手だと判別されました」

参謀長と元帥からはその事に付いて報告は受けていない。

彼らに付いている間諜も、特にその事については何も言っていないかった。

恐らく、キース達は誰の記録かを上手くごまかして検証したのだろう。

三公がイーリスの、カミジール家の行っている調略戦を台無しにするとは思えないからだ。

そう信頼できるほどの関係は、築いている。

「……そんなの偶然でしょう。ええ、よしんば私が殿下とファミルス様へそんな手を打っていたとして、それがどうかしたの？ それにしても三公まで巻き込んで検証するなんて。皆様はよほどお暇なのですね？ 羨ましい事ですわ」

「……………」

「な、なんですか？ そのように怖い顔をされても、私からは何も言う事はございませんよ？」

心配が鋭くなる。

それと同時に、周囲に控えている間諜達にも緊張が走ったのを感じ取る。

一人いなくなったのは、アイリスに状況を伝えるためだろうか。まずい。

これは、本格的に――まずい。

「単刀直入に聞きます。貴方は――殿下を害する者か」

すらりと、腰に佩いていた剣が抜かれる。
その切っ先が向くのは、イーリスの顔だ。
彼我の距離は一メートルもない。

「ひっ……っ！　け、剣を……剣を向けるとはどういう事ですかっ！」

「あくまで白を切り通すおつもりか」

「白を切るも何も、本当に身に覚えのない事ですわっ！　それにこの状況——殿下が知れば、貴方の首が飛びますわよっ！　現状私は正妃候補。その相手に剣を向けるなど……っ！」

「殿下からは、貴方に対する疑惑を我々の裁量で確認するように、と下知を受けています。さあ、お答を」

周囲の間諜達が武器を取り出したのを、気配で察する。

抑えているが、明らかに殺意に溢れている。

まずい。

そして何より不味いのは——イーリスの気配が、近づいてきていると言う事だ。

上手く気殺しているが、それでも気づけるものは気づくレベル。
最も、あのイーリスの気配断ちを気づける者は、この国に数人しかいないだろうが。

「剣で脅されようと、そんな怖い顔を成されようと、私の答えは一つです。知らない者は知らないですし、私に殿下を害するつもりなど——！」

「……っ！——」

イーリスの言葉の最中、ゆらりとキースから殺気が立ち上った。
剣を振う気だ。

服の下で強張った筋肉を確認しながら、イーリスは万が一の事を考え重心の位置を変えた。

座ったこの状況から、瞬時に動けるようにするためだ。

そうしていると、アイリスが薄く扉を開け、滑り込むように入りこんでくる。

キースは気づいていない。

アイリスの手には苦無——小さい刃渡りの刃——が握られており、その目はいつそ見事なほどに冷たい。

殺気が無い。

殺意すらもない。

気も意も無く無意識で当たり前のように人を殺せるように訓練された、完成された暗殺者——蛇の姿が、そこにはあった。

周りに控えている者たちも、アイリスが入って来た事でさらにその臨戦態勢を強める。

間抜けにも、その気をキースに感じ取られながら、だ。

キースの視線が鋭く間諜達が控えている場所へ投げられる。

「この気配……。やはり貴方、いや貴様は……。っ！ 殿下からの裁

きは甘んじて受けるが、貴様はここで——」

「待てっ！！」

怒鳴る。

それは、キースが突き出した剣を一度引いて、イーリスを殺す為に前に出ようとしたからではない。

そのキースを、アイリスが一撃のもとに殺そうとしたからだ。

無論、周りの間諜達も。

総勢五人。

アイリスが首筋に苦無を、他の間諜達は腕に、足に、腹に、胸に、刃を立てる寸前でその動きを止めていた。

「……………っ!!?」

キースの目が驚愕に見開かれる。

ぴたりと、動きを止めながら、視線だけで今の状況を確認しているのを見てとりながら、イーリスは重心を元に戻し椅子に座りなおした。

「アイリス、デイジー、ダンデ、ゼファイ、フヨウ——止めなさい。刃を引いて、アイリス以外は定位置に戻る事。後でスイレンと合わせて話があります」

「御意」

イーリスの言葉に従い、四人の間諜が刃を仕舞い音もなく定位置——先ほどまで潜んでいた場所へ戻る。

戻った後は、息を殺し、本来の任務である鳩の役目に戻る。

四とも女性の間諜であり、そしてそれぞれ王子、国王、参謀長、宰相、元帥がイーリスに放った子飼であり、同時にカミジール家配下の鼠である。

「アイリスは私の傍に。苦無も仕舞いなさい」

「わかりました、お嬢様」

ゆっくりとした、しかし一分も油断のない滑らかな動きでアイリスはイーリスの側に控える。

「キース様も、いい加減剣を納めてください。もう、こうなつてはうやむやにも出来ないものである程度は話しますから。最も、それを殿下に報告させはしません」

「な……っ!」

「ちなみに、三公ならびに陛下は私の事を存じております。逆に言

えば、これは三公と陛下以外は知ってはならない、という事です、今回は私の不注意でキース様、ならびにカイル様に気づかれてしまったと言う事で正直にお話しますが、それは絶対に殿下に話してはいけません。納得が出来ないと言うのであれば、ミゲール様か陛下に直接お尋ねください」

こうなると、もう変な猫を被るのも面倒である。

早かった。

イーリスとしては、最後の最後まで演技を貫き通し、嫌われたまま終わろうとしていたと言うのに。

それが――たったの十日で露見したのだから。

自分のうかつさに腹が立ちと共に、僅かそれだけのことで気が付けた二人の騎士に惜しめない称賛を贈ろう。

女と見れば見下すことしか知らず、イーリスの演技を欠片も疑わなかったあの王子と比べれば雲泥の差だ。

内心でそう王子をけなす事で平静を保ちつつ、イーリスはアイリスに言って化粧落としを持ってきてもらう。

キースに背を向けて派手な化粧を落とし、すぐに実家でしている控えめな身の丈に合った化粧を施す。

服を着替えるのは面倒なので、服装はそのままに。

演技したい傲慢な空気を消し、素の物に戻すと、イーリスは真っ直ぐとキースへ視線を送る。

「それでは、改めまして。カミジール男爵家の三女、イーリス・ミル・カミジールです。事の詳細はカイル様が戻られてからで構いませんね？ キース様」

「え、ええ……はい。それは、別に……いや、何が、なんだか。正直混乱しています」

猫かぶりを辞めたイーリスの態度に、困惑の様子を示す近衛騎士。

優秀な男のそんな様子を見て内心で溜飲を下げつつ、イーリスは静かに微笑んだ。

この後の説明が、少し面倒だと本気で考えながら。

糾弾を止めるは従者の刃（後書き）

というわけで、第七話でした。

今回はイーリス素顔をばらすの巻。

キース君が無茶苦茶していますが、そこはほら、彼もあせっていたという事でひとつ。

思い込んだら一直線な人なんです、きっと、たぶん……そういう事にしておいてください（何

今回はイーリス、自分の正体を少しだけ語るの巻。でも本格的な暴露はまだ数羽先の予定。

それでは、読んでいただきありがとうございました。
また次話でお会いしましょう。

P. S

……………ずうずうしいお願いですが、感想お願いします（土下座

事情説明（前書き）

第八話をお届けします。

これでストックはほぼゼロ。ああー、もっと書かなくちゃなあー、と思いつつ今日もカチカチ執筆です。

とりあえず、後三話くらいで物語の導入部分は終わりで、話を展開させていけるようになるかなと思いつつ。

とりあえず、この序章部分だけでも書きあげてしまうつもりです。それまでは毎日更新を厳守なんだぜ……っ！

というわけで、どうぞお楽しみいただければ幸いです。

事情説明

「簡単に言えば、私は殿下の正妃になどなりたくないのです」

顔を知ってから今日までの傲慢さを微塵も感じさせない清楚な雰囲気携えながら、目の前でイーリスが静かに語りだす。

隣にいるカイルも少々啞然としているようだ、と空気で感じながら、キースは混乱から冷めやらぬ頭を動かし、これまでの経緯を確認する。

まず、王子たちとの会議に出席し、目の前にいる令嬢に関する疑惑を上げた。

そこから宰相が「それならば直に確認すればいい」というような発言をし、王子がそれを認めたのだ。

そしてキースとカイルは今いるこの部屋までやってきて、イーリスに質問——いや、詰問を行った。

その場にカイルはいなかったが、いたとしてもやった事は変わらないだろう。

あくまで白を切る様子に業を煮やし、剣を抜いて脅しをかけた。そうすれば、いくらなんでもしゃべるだろうと。

もし白だったとしても、その場合は自分が責めを負えばいいと、その時は本気で考えていた。

すぐに王子に事情を話し、自ら死を選べば咎は自分だけで背負えるだろうと。

剣を向けてもなお白を切る様子に思わず激高した時、自分が何人もの刺客に囲まれている事に気がついた。

思い出す。

自分から行動した結果でイーリスの部屋に来たと言うのに、それすらも彼女に謀られたとその時は思いこみ、イーリスが完全に黒だと決めつけ、刺し違えてでも殺そうとしたのだったか。

周囲からあふれ出す殺気に覚悟を決めた時。

全てを停止させる一喝で、その部屋にいた者が全員動きを止めた。気がつけば自分の刃は相手の眼前にあり。

自分はそこから少しでも動けば死んでいたと理解した。

全身に気づかぬ内に付き付けられた、何本もの刃によって。

その後の事は、まるで魔法で幻を見せられたようにも感じられた。間諜たちを下がらせたイーリスは静かな声で説明を始めた。

自分の事は王と三公が知っており、そしてそれ以外誰も知らぬ事なのだと。

こうなっては仕方がないから大筋を話すが、他言無用だと。

確認したければ王か三公に確認しろと、そう言った。

次いで侍女に化粧落としと化粧道具を持ってくるように指示をすると、すぐに化粧を落とし始めた。

そしてあれほどまでにドギツかったモノをあっさりと落とし、自分の魅力を引き出すような薄い化粧へと変え、雰囲気すらもがらりと変えたイーリスを見て。

正直な所、キースは見惚れてしまったのだ。

容姿も、他の候補者と比べれば劣っているのは間違いない。

スタイルも、正直なところもう少し肉付きがいい方が好みだ。

だが。

それまでの印象が最悪だったからと言えば言い訳になるが、その凛とした佇まいや、知性を感じられる相貌の輝き、思った以上に柔らかく優しい声音に、今まで感じた事が無いような美しさを感じたのだ。

「……キース様？ 聞いておられますか？」

「――あ、はい、ええ。聞いています」

「……本当に？ では、今私が何を説明していたかをお話しいただけますか？」

「……………申し訳ない、少し思考に入っていて、聞いていなかった」

はあ、とこれ見よがしにため息をつかれる。

気まずい気分を抱えていると、隣でカイルが笑みをかみ殺しているのに気がつく。

後で覚えていろよ、と思いながらイーリスへ視線を戻すと、彼女は「やれやれ」とでも言いたそうな仕草で首を振った後で、顔を真っ直ぐとキースへと向けた。

「ではもう一度。今度はしっかり聞いてくださいね？」

「はい」

「私はそもそも、殿下の正妃になるためにこの場に来たものではありません。本来ならば、カミジール家からは誰も候補者を選出しない予定でした。実際、最初のお触れには否の返事を返しましたから」

「……………え？」

その言葉に目を見開く。

否を出した？

王城からの、勅命に？

「しばらくしてミゲール様が直接当家にいらっしゃって、父と交渉を行いました。その場に、私たち四姉妹を同席させた上で」

その説明によれば、宰相は今回の勅命の発端が自分にあると最初に話したらしい。

そして、その意図も。

話の中心にいるレンフィールド王子は、端的に言って女嫌いだ。勿論女という性別そのものが嫌いなのではない。

それは、王子と共に何度も城下の花街へお忍びで出た事がある自分がよく知っている。

王子が嫌いなのは、自分の権力に擦り寄ってきたり、自分の事を綺麗だと優れていると声高に主張したり、他者を悪戯に貶めるような貴族令嬢だ。

それこそ、つい先ほどまでのイーリスのような。

だからこそ、王子は今まで正妃を取ってこなかった。

国の情勢で他国の姫を正妃に迎え入れられなかった為、王子の正妃は必然的に国内から選出する事になる。

本来、アークジュエル王国の王族は二十歳前までに正妃を決め、世継ぎを成す為に努力をするものなのだ。

だがレンフィールドは徹底的にそれを拒み、貴族の令嬢たちと話をするのも嫌がった。

弟であるリンスミートも、兄に感化されたのか軽度の女嫌いに育ち、まだ浮いた噂の一つもない。

このままでは王国の将来が危ない。

現王は高齢であり、何かのはずみで死んでしまう事が無いとは言えない状態だ。

だからこそ宰相は無理やりに正妃を決めようと今回の候補選出、ならびに王子との交流を提案した。

今回の状況を見てもわかるとおり、その提案は通り国中の貴族――爵位持ちの貴族から候補者が集められた。

アークジュエル王国では貴族を爵位の有無で区別しており、爵位が無い貴族の事を一般的に准貴族と呼んでいる。

それでも貴族は貴族なのだが、今回は爵位持ちだけが候補者を出す事命じられた。

現在の爵位持ちは公爵が三家、侯爵が五家、伯爵が九家、子爵が十三家、男爵が十五家の計四十五家となっている。

宰相が男爵の家に訪問する段階でほぼ全ての爵位持ち貴族からは候補者が推薦されており、厳密な調査の結果十一名だけが正妃候補

として決まっていたようである。

ちなみにその時候補者を出していなかったのは、カミジール男爵家をはじめ、シレット子爵家、ラトナビュラ公爵家、セーイロン公爵家の四家であり、それぞれ宰相が訪れて説得したらしい。

「ミゲール様は、殿下をその気に——つまり正妃を娶る気にさせるために、私たちカミジール家に協力してほしい、と」

「女嫌いの殿下をその気に、ですか」

「ええ。だからこそ、まず私は殿下が嫌いな女性を研究し、その通りになりきました。まず自分が正妃として選ばれないために。ミゲール様をお願いして、資料の改竄も行いながら」

その説明に、しかしとカイルが疑問を上げる。

「しかし、それではもし最初のパーティーで帰る組みに入ったとしたらどうされたのです？　今回は残られたので他の候補者たちと接触する機会がありましたか、お帰りになられた場合はどうするつもりだったのですか？」

「その時は勿論、素直に帰っていましたよ。ただ、帰った後ですぐ王都に引き返し、侍女たちを使って候補者と殿下が親しくなるような機会を設ける予定でした。有力な候補が誰か、というのは初日のパーティーで既に掴んでいましたからね」

「な、なるほど……」

「今回は幸いにとにかく不幸にもというか、こうして候補者の中に残ったわけです。だからこそ他の候補者と一緒になる機会もあり、直接焚きつけたり、自分を出汁にして殿下との仲を親密にする流れを取ったりしました」

その言葉に、素直に納得する。

そう言われれば、此方が疑問に思った全ての事に説明がつくから。

「キース様に指摘された戦略遊戲については、今後私たちが使える主の現在の力量を調べるのと、ファミルス様が正妃になった場合にどの程度先を見通す目があるのかを確認するためにああやって回りくどい事をしてました。かなり不遜な事なので、黙っていただければありがたいのですが」

「え、ええ。それは勿論。あれほど訳知り顔で語っておいてなんですが、元々気がついたのは私ではなくカイルですしね。私から殿下に申し上げる事はありません」

「あ、ええ、勿論私も申しません」

慌てて追従するカイル。

それにしても、だ。

まだ肝心な事が聞けていない。

このイーリス・ミル・カミジールという少女が何者なのか、という事を。

「ああ、それとキース様もカイル様も、私に対してそんな敬語を使う必要はありませんよ？ 勿論公的な場所では殿下の正妃候補としての扱いをしなければいけないと思いますので構いませんが、こうして余計な目が無い時は普通に男爵家の小娘だと思って話してください。身分の高い方にそんなしゃべり方をされては、正直戸惑ってしまいます」

「え、あ……そうですね。いや、そうだな。わかった」

「僕も了解しました、イーリス様ただ、敬称を付けるのだけは許して下さいね？ どこで誰が聞いているとも分からないですし、とっさの時にボロが出て困りますから」

「ちなみに、カイルのしゃべり方はこれが素だ。俺にも部下にもたいていこの口調を崩す事は無い。例外と言えば、妹のファミルス様くらいか」

「なるほど……そうなんですね。では、それでお願いします。やはり此方の方が話しやすいですね、私としては」

ふう、とため息をひとつつくイーリス。

それだけでも今までの印象とずいぶん違うせいで、やたらと愛らしく見えるから不思議だ。

「それで、お二人はまだ質問があるんですね？ 私に。多分……先ほどキース様もおっしゃっていた、私の正体について、だと思いますが」

此方から切り出す前に、彼女の方から問いかけが来る。

詰問の時に確かにその言葉は口に出したが、教えてもらえるのだろうか？

「これから私が話そうとしている事は、国家機密に当たらないようになります。知ってしまったが最後、本来であれば死によって口を封じるたぐいの話です」

「……っ！」

カイルが息をのむ。

キースは、先ほど似たような事を聞かされている。

王と三公以外は知ってはならぬ事、と。

「私個人としては、ここまでの事に自力でたどり着いたお二人に話すのは吝かではないと考えています。ただ、私の一存では決められない事です。明日の夜までに関係者へ確認を取るつもりです」

「それほどまでに……それほどまでに重要な事なのですか？ イーリス様の正体というのは」

「はい。直接的な関係者以外は、陛下と、宰相・元帥・参謀長の三公しか知ってはならない話です。ですから、この話を聞いた場合――お二人は完全に此方の身内になってもらわねばならないと思います」

「……身内？」

「それもまた明日説明できると思いますが……。何にせよ、先ほども言いましたが聞いたら最後です。今なら聞かなくていいと引き返す事もできます。ただ、その場合二度と触れようとしないでください。私の目的自体はお教えしましたので、今後無用な警戒をする必要はなくなるでしょうし」

此方にとって最悪、あちらにとって最善が口を封じる事。

だがキースもカイルも、今の地位が高すぎるのだ。不用意に、口を封じられない程には。

これが戦時中だとしたら、迷わず最前線に送られ口封じされてもおかしくは無いのだろう。

それだけの話なのだと、先ほど自分に付き付けられたいくつもの刃を思い出し、身震いする。

「猶予は明日の夜までです。それまでに、話を聞くかどうかを決めてきてください。ただ、今ここで話した事も他言無用ですので、本当にご自分だけで考えてください」

もしも、と。

言葉が続ける彼女の瞳は、冷徹な寒気がする程の光を宿していた。

「もしも他言した場合……申し訳ありませんが、その場で聞いた相手も含め口封じを行う事になると思いますので、気を付けてくださいね」

それは世間一般的には脅迫と呼ばれるような文言ではなかったか。実際、脅迫されているのだろう。

「それでは、本当によく考えてください。ある意味今後のお二人の人生に関わる話、と言っても過言ではないので」

厭な言葉だ。

だが、それ以上に此方を氣遣っているのだと分かる。

先ほどまで冷徹だった瞳に、心配の色が宿っているのだ。

心優しい娘なのだろう。

そう、すくと心の中に感想が落ち着いた。

「それでは、申し訳ありませんがお二人には外へ出ていってもらいたく。これから食事を取って湯浴みをして、寝ようと思いますので」

氣がつけば、もう時間はだいぶ遅い。

そもそもこの場に訪れたのが夕方近かった。

女性の、それも王子の正妃候補の部屋に男がいる時間ではない。分かりました、と二人は慌てて部屋を出ていく。

無論慌てているからと言って、礼儀作法はきっちりとなしていく。

とりあえず宰相に報告しよう。

通路に出てその方針だけカイルと決め、二人で連れだって歩いていく。

その、最中。

「……ねえ、キースさん」

「なんだ、カイル」

「イーリス様って……あんなに美しい人だったんですねえ」

「な……っ！」

隣の男からの言葉に、目を見開く。

心なしか、声に熱がこもっている気がする。

慌ててカイルの顔を見れば、そこには隠しきれない熱が見てとれた。

「確かに顔の造形はお世辞にも絶世の美女とはいえないかもしれないけど、それでもあの魂の輝きとでも言うんでしょうか？ 雰囲気から来るものだと思うのですけど……。上手く表現できませんね。でも、あの人は美しい。そうは思わないですか？」

これは、どうしたのだろうか。

これほどまで熱を持って女性を語るカイルを、キースは見た事が無い。

だが――。

「そう、だな。その言葉には、同意する」

「ええ、キースさんもやっぱりそう思いますよね？　そうですね

……」

カイルの言葉に、キースもまた頷いた。

思い出すのは、間諜たちを一喝したイーリスの声だ。

あの時はまだ酷い化粧をした姿だったが、それでもあの声には魂が震えた。

王と、王子以来だろうか。

その声に、覇気に――無条件で従いたくなるような、王者の気質を感じたのは。

「……それはともかくとして。ともかく、明日の夜までに考えを纏めておかねば。そのためにも早くミゲール様に報告しよう」

「そうだね。今後の事も含め、本当によく考えないと」

「ああ、そうだな……」

今日は、本当に色々な事があった。

密度が濃いとでも言えればいいのだろうか。

本当に、本当に――色々な事が、あった。

明日もまた同じように色々な事が起こるのだろうか。

そんな事を考えつつ、キースはやや歩くスピードを上げ、宰相の執務室へと向かっていくのであった。

事情説明（後書き）

第八話、読んでいただきありがとうございました。

これでとりあえず色々暴露第一段階終了。

この後さらにばらす話がもう一話入って、その後に次章に入る予定。相変わらず王子様の出番ほとんどなし。というか、作者ですらイリスが誰とくつつくかわかりません、というのが一番の問題のような……。

とりあえず、次はクッション会。イリスとアイリスの漫才みたいなのやり取りをかければいいなあ、と思っています。

それでは。

P・S 春桜花様、感想ありがとうございました！ 本当にうれしいですっ！ 励みにして頑張りますっ！

主従の会話　く無欲で無自覚なお嬢様く（前書き）

というわけで、第九話です。

今日は少し早目に更新。ちょっと早く家に帰ってこれたので。

イーリスとアイリスの会話がメイン。

イーリスは基本的に自分に魅力があるとは考えてない子だと思います、ええ。

それでは、お楽しみくださいませ

主従の会話　　く無欲で無自覚なお嬢様く

「お嬢様？」

「なあに？　アイリス」

「その、宜しかったのですか？」

「何が？」

「キース様と、カイル様の事です」

二人の騎士が去った後。

とりあえず王と三公、そして実家宛の書状を書いて配下の者たちに手渡した後、イーリスとアイリスの主従はカイルが用意させたお茶でまったりとお茶会を開いていた。

その中でもたらされた質問に、少しでも首を傾げたイーリスは、そうねえ、と前置きしたうえで考えを述べる。

「正直な所、あんまりよくは無いけど……。でも、これってチャンスじゃないかしら？」

「チャンス、ですか？」

「ええ。フェリス姉さまとシェリスの結婚相手、あの二人とかどう？」

「……………は？」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をするアイリス。

そして、思わずといった調子で気配を漏らすこの部屋を監視しているはずの間諜達。

「ゼファイ、ダンデ、サイス、貴女達、今回の任務が終わったら特別修練ね。気殺の」

部屋を見回して気配を漏らしたのが誰かを瞬時に特定し、釘をさす。

悲鳴じみた気配が漏れた後、すぐにそれが消える。

これ以上無様に気配を垂れ流したりしたら、特別修練が酷くなる。そう経験で知っているが故だ。

完全に気配が消えたのを確認し満足そうにうなずくと、まだ驚いた顔をしているアイリスへと視線を戻す。

「だから、フェリス姉さまとシェリスの結婚相手。キース様は確か二十二歳、カイル様は二十一歳だったわよね？」

「え、ええ……」

「フェリス姉さまは十八歳だし、キース様とお似合いでしょう？ カイル様ともお似合いだとは思うけれど……。シェリスが十五歳になるころには、もう結婚相手を見つけてる可能性もあるわよね、兩名とも」

「……あ、あの、イーリス様？」

「幸いここでカミジール家の秘密を教えてしまえば、陛下も三公もあの二人を我が家に取り込む事に否は申されないでしょうし……。私のあれを見破ったのであれば、カミジール家の婿にはふさわしいじゃない？」

未来の義兄に義弟候補。

それを見つけた、とイーリスは嬉しそうに微笑む。

「二人とも美男子だし、姉さまとシェリスと並べば絵になるわよね」「というか、シェリス様が相手だと、相手に幼女趣味疑惑が持ち上がる可能性もあります……」

「あら、十歳差程度普通じゃない。だって、私だって殿下と八歳も年が離れているのに候補として上がったのよ？　二十歳差もあるわけじゃないんだし、問題は無いわ。シェリスは十分に愛らしいし、きつとどちらかは氣に思うのよね」

名案名案、と頷くイーリスに、アイリスは頭を抱える。

「その……失礼ですが、イーリス様のお相手はどうするんですか？」
「私？　いいわよ、私は生涯独身で。別に夫が欲しいわけじゃないし、夫がいなくても問題ないしね。姉さま達やシェリスの子供を自分の子供だと思って愛し、カミジール家の子として鍛え上げる事に心血を注ぐと決めているの」

言葉も出ないとはこの事だ、とアイリスは自分の主を凝視してしまふ。

「身内って……イーリス様のお婿にする、という事ではなかったんですね」

「あたりまえじゃない。あの二人と私とじゃ釣り合わないわよ。それに、私に男を二人も囲えっていうの？」

「そう言うわけじゃないですが……。でも、本当に婿を取るつもりはないんですか？　確かにイーリス様の立場では嫁に出る事は出来ないでしょうけれど、お婿さんは十分に取れると思うんですが……」

従者からの言葉に、イーリスは思わずと言った調子で笑みを浮かべる。

「いいのよ、私は。恋をして、あるいは恋をせずとも婿を取って子供を産んで育てるより、もっと大事な事がいっぱいあるもの。それに、私の子供はもういっぱいいるわ」

「いっぱい、ですか」

「ええ。貴女もそうだし、ゼフィたちもそう。カミジール家に所縁のある全ての人々が、私の子よ。私が育み、私が護らなくてはならない愛し子たち。それだけ多い子供を抱えてるんだから、もう新しく子供はいらないわ。何せ、私が何もしなくても増えていくんですから」

イーリスはカミジール家に置いて、他者を教育する立場にある。

カミジール男爵領は、間諜達の育成機関であり、巣立つ場所であり、帰る場所でもある。

領民は全て何らかの技能を持っているし、吟遊詩人や旅芸人となって諸国を漫遊する者たちもいれば、それぞれの才能を伸ばしそれを武器に他国へ入りこむ者もいる。

イーリスは十六歳という若さでその機関の長を務めており、何よりもその才覚と能力はベテランの間諜に引けを取らない物だ。

足りないのは経験だけ、とすら言われている。

所謂天才。それが、イーリスという少女なのである。

そんなイーリスだからこそ、領民全てが――自分の教育機関の下にいる全ての者が子供だと思っている。

年代も性別も関係なく。

そして、有事の際は共に手を握り合い、外敵を滅する仲間である
と。

同時に彼らの命を護るべき立場にあると、強く認識している。

「私は忍よ、アイリス。忍たるもの、領地を伴侶とし、領民を子として生きていく者。そんな私に、人間の伴侶はいらないわ」

「ですが……」

「いいの、別に私だって欲しいわけじゃないんだから。ああ、別に姉さま達と違って一人だけとびぬけて普通の容姿だからっていうのが理由じゃないわよ？ 本当に。本当にそう思ってるの、私は」

だから気にしないで、とイーリスは笑う。

忍。

それは、カミジール家の間諜に存在する位階の最上位だ。

修業を始めたばかりの子供を卵と呼び、ある程度任務をこなせるようになると雛、次いで単独で行動できるようになると成鳥、熟練になり教え子を持つようになると親と呼ばれるようになる。

普通はそこまで終わる。

では、忍とは何か。

それは、カミジール家の間諜が与えられる役割を、ひとつ残らず網羅できる者に与えられる位階だ。

平民や侍女など身分が低い関係者として潜り込み情報を探る鼠、様々な場所に侵入して情報を奪う鳩、要人の暗殺を行う蛇、他国の要職について情報を収集する蝙蝠、旅人や芸人に扮して諸国の情報を集める燕、カミジール家以外の間諜達を見つけ出し捕まえ、情報を絞り取る猫、素早く情報を伝達する術を持った鷹、罠のスペシャリストである土竜に、要人の警護を行う犬。それらを教育する立場にある調教師。

忍とはそれらの役割を全て単独で全うできる知識と能力を有する者に与えられる名であり、カミジール家の要でもある。

名前の由来は、遙か昔、東国から流れ着いた間諜がその名を名乗っていたから。

向こうでは間諜の事を忍者と呼ぶらしい。

その忍者がありとあらゆる事に精通していたため、カミジール家ではその忍者と出会って以降、全ての能力を持つ者を忍と呼ぶようになったのだ。

イーリスは、忍だ。

領民からは忍姫と呼ばれて慕われており、イーリスもその能力を惜しげもなく次代の者たちへと伝えているし、経験の深い先達から様々な知識を受け継いでいる。

現在カミジール男爵領に、忍は二十人しかない。
その殆どが老齢に達している中、一際若く輝いている存在。
それが、イーリスなのだ。

「まあ、それに私を愛する物好きなんてそうそういないわよ。特に貴族には」

「確かに、交流のある貴族の方々は皆フェリス様達ばかりを見ていらっしゃるからねえ……。イーリス様もこんなにお美しのに、本当に見る目が無い方々でした」

「こら、アイリス？ そんな風に言ってはだめよ？ それに美しくないわよ、私は。美しいっていうのは姉さまやシェリスにふさわしい言葉よ？」

「いいじゃないですか、誰が聞いてるわけでもない」

「ゼフィ達が聞いてるじゃない」

「あの子達は良いんです。どうせこの事は報告しないんですから。……しないわよねえ？」

「……アイリス、殺気、殺気を仕舞いなさい。ダメよ、そんな指向性を上手く調整できてない殺気を撒いちゃ。もしかして、あの子達の場所が分からないの？」

「い、いえ……そんなことはありませんよ？」

「……………貴女も、この一件が終わったら特別修練ね。周囲警戒と気配察知の」

「お嬢様!？」

部屋に潜んでいる間諜達へ殺気を飛ばしていたアイリスの顔が、イーリスの発言で一気に蒼白へと傾く。

ちなみに特別修練というのは、別名地獄の一丁目と言い、参加したものが参加前に比べて数倍の能力を得る代わりに色々大事なものを失うと評判のものだ。

無くすのは、主にプライドや羞恥、その他もろもろらしい。

「そ、それはさておいて」

「ちゃんと後でお父様に手紙を出しておきますからね。全員分の修練を用意するようにって」

「それはさておいて！……ごほん。唯一イーリス様の魅力に気が付いていたサバロ様はキキョウ様の婚約者になられてしまいましたし。領民とからの人気はとても高いんですけどねえ」

「一応、これでも貴族ですからね。流石に平民階級と婚姻を結んだら、カミジール家が無用な攻撃にあうだろうし」

それに子供とは結婚できないわよ、と苦笑を浮かべる。

「まあ、私の事は良いわ、別に。それよりもアイリスの相手を見つける方が先だしね」

「……私、ですか？」

「そうそう、貴女。優秀で大切な部下に良縁を持っていくのも大事な主の仕事ですもの」

「そ、そう、ですか」

（私の事よりも、イーリス様の方が大事なのに……）

にこにこ笑いながら言うイーリスに、少しだけアイリスは不満を覚える。

（イーリス様が幸せな家庭を持つ事こそ、領民も旦那様もご姉妹も望んでるのになあ）

他者の事を大事に考えていると言えば聞こえがいい。

だが、その実自分というモノをあまりにも蔑にしているだけなのだ。

忍としての自分以外にはまるで価値が無いと、敬愛する主が考えている。

その事が、何よりも悲しい。

「さて、とりあえずお父様から返事が届くのは明日の昼ごろかしら」「シラーに頼んでありますから、もう少し早いかもれません。あの子、相当足が速いですし、愛馬もタフですから」

シラーと言うのは、イーリスが抱えている鷹の少女だ。

愛馬のオーキスと共に駆け、カミジール男爵領までなら一日で往復が可能である。

ちなみに、一般的に馬で男爵領まで行こうとするとどれだけ急いでも二日はかかる。

実に普通という概念の四倍速で動けるのだ、シラーとオーキスは。それでもカミジール家のトップではないと言うのだから恐ろしい。

「そうね、それではそれまでに根回しは完全に済ませておかないと」「キース様もカイル様も立場が微妙ですからねえ……。カイル様はともかく、キース様はなまじ王族関係者というのが」

「そのあたりは陛下とミゲール様が何とかしてくれるわよ、きっと」

何とかさせるんじゃないのだろうか、とはイーリス以外の全員が心の中で思った見解だ。

「ま、なんにせよ勝負は明日よ、明日。今日はもう湯浴みして寝てしましましょう。英気を養わないとね」

「分かりました、お嬢様。お背中お流ししますね」

よろしくお願いね、と微笑んで浴室へとイーリスは移動していく。
その後を追いつながら、アイリスはこの国のトップ三人と主の実家
へ内心で黙祷を捧げる。

確実に、声にならない大騒ぎを行っているに決まっているのだか
ら。

主従の会話　く無欲で無自覚なお嬢様く（後書き）

というわけで、第九話。アイリス、イーリスの伴侶を望むの会でした。

この話の着地点、王子とくつつくのかキースとくつつくのかカイルとくつつくのか、大穴でリンスミート第二王子とくつつくのか全然定まっていけないという罨。

まだ本格的な恋愛ストーリーには入っていないような気がするのですが、読者の皆様の意見次第ではルートが迷走する可能性があります。もしこのキャラクターとくつついて欲しいという要望があれば、一言感想に入れていただければ参考にさせていただきます。

……アイリスとの百合ルートもありですよ？　い、いや嘘ですが。

それでは、また明日更新できる事を願いつつ。

読んでいただき、ありがとうございました。

課報機関カミジール（前書き）

勢いに乗って書いていたらもう一話できたので、投稿してみたりします。

というわけで、第十話です。

速いもので、もう十話……。おかしい、まだ章と言えば序章、あるいは第一章、起承転結の起のはずなのに、もう十話。

冗長すぎですね、ごめんなさい。

でも、とりあえずこれの次、十一話で序章は終わりそうです。其方はたぶん明日投稿する事になると思います。

現在鋭意執筆中。

それでは、お楽しみください。

諜報機関カミジール

「キース様、カイル様。ようこそ、いらっしやいませ」

夜。

緊張した面持ちの近衛騎士二人がイーリスの部屋を訪ねてきた。無論、昨日の続きをするためだ。

どうぞ、とアイリスに用意させておいた椅子を進めると、テーブルを挟んで二人と対峙する。

ちなみにアイリスは、また情報収集に出かけている。

今は、イーリスを監視するために派遣された間諜の一人に従者の役をやらせていた。

「……それでは早速本題ですが、どうするのか——決められたのですか？」

質問はイーリスから。

話の主導権を完全に握るためだ。

「ええ、決めてきました。宰相と元帥から助言を頂きましたし、覚悟もしてきました。今後の人生を、カミジール男爵家と共に過ごす覚悟を」

「俺もカイルと同じく、だ。一応ウーヴァ家の長男って身分だが、養子だしな、俺は。幸い出来のいい弟もいるし、家を出る覚悟はできている」

帰って来たのは、強い眼差しに支えられた言葉。

二人とも真っ直ぐとイーリスの目を見て決意を語っていた。

昨日の話の後宰相と話をし、続きを聞くならば家を出なければならぬ、と言われたらしい。

実際そうなるが――此方から決断を迫ったとはいえ、立った一晩で決めて良いものなのだろうか。

しかし、瞳に宿る色に揺るぎは無い。

良く見れば、二人とも目の下に隈が出来ている。

相当悩んだのだろう、きつと。

ならば。

此方も、その覚悟に見合う話をするべきだ。

分かりました、と頷きを帰すと、イーリスは少しだけ目を閉じる。何から話そうか、と話す場所を決めているのだ。

（話せるのは……やっぱり家の家業だけ、よね。それ以上は……本当に家族にならないと、教えてはならない）

整理し、改めて腹を括り直す。

目を開き、真っ直ぐ交互に二人の目を見つめる。

「それでは、大まかな説明にはなりますが、私の正体――カミジール男爵家の正体についてお話します」

そうして、イーリスは静かに語りだす。

カミジール家が背負う、役目を。

イーリスの目が開かれた瞬間、カイルはその目に込められた力に気押された。

年下の少女に、気合負けしたのである。

（やはり……。ああ、僕が綺麗だと思ったのは、この目だ）

強い意志が宿る、漆黒の目。

アークジュエル王国では珍しい黒目に黒髪はイーリスという少女を凜と引き立たせる要素になっており、その瞳に秘められた力は歴戦の将軍に似た物がある。

思慮深く、それでいて勇猛さも兼ね備えたような、そんな色。

それが震えるほどに、美しいと感じた。

「最初に質問しますが、キース様もカイル様も不思議に思った事はありませんか？ 何故、アークジュエル王国から外国へと続く四街道の内一つが、男爵家などという貴族の中でも低い地位にいる者の領地にあるのかを」

「ああ、確かに。ずいぶん前に元帥に尋ねた事がある。何故、あんな要所を納めているのが男爵家なのだ、と。その時は上手くはぐらかされたが、そう言えばその後は特に疑問に思わなかったな……」

「キースさんみたいに直接疑問をぶつけた事はありませんでしたが、確かにそれは疑問でした。僕なりに調べてみたのですが、資料ではカミジール家があの街道を作り整備したからだ、とありましたね」

それで納得していた。

というのもそれよりも重要な調べ物は数多くあったし、丁度ここ数年で都合三回、他国から侵略を受けそうになった事も原因としてあげられる。

「簡単に言えば、カミジール家があの場所を任された背景は、あの街道の先にあるシンクレア傭兵国が最もアークジュエル王国を狙い兵を派遣してきていたからです」

「……は？」

キースが哑然としたような顔で疑問符の声をあげる。

声は挙げなかったが、カイルも心情としては同じだ。

最も苛烈な戦地だったから、カミジール家がその場所にいる事になった、だと？

それは、どういう事だ。

それではまるで、カミジール家こそがアークジュエル最強の軍を持っていたという事ではないか。

「元々、カミジール男爵家は流れの旅芸人一座でした。それが様々な縁を経て当時の王と交流を深め、その力を貸す事になったのです」
「ちょ、ちょっと待てイーリス嬢。何故王が旅芸人の力が必要としたんだ？」

「それは、旅芸人という名の間諜だったからです、キース様」

「間諜……？」

「ええ。カミジール男爵家の正体というのは、アークジュエル王国随一の諜報組織なんです」

「諜報組織……ですか」

「この国に仕える前、カミジール家は流れの旅一座として世界を回り、権力者たちから依頼を受けることで間諜としての働きをしていました。主に情報の売り買いを行っていた、と記録が残っています」
「カミジール男爵家が出来たのは、確か約二百年前でしたよね。その頃のアークジュエル王国は無敵王国として有りつつも、たび重なる戦争で大分疲弊していたはず」

「ええ。元々アークジュエル王国はカミジール家の取引先の一つだったようです。そして祖先がこの国を訪れた時、丁度シンクレア傭

兵国が侵略を行おうとしていました」

その後続いたイーリスの話を要約すると、次のようになる。

二百年前、戦争で疲弊していたアークジュエル王国を侵略しようと、シンクレア傭兵国が出兵を決断しようとしていた。

その情報を持ってアークジュエルにやって来た初代カミジール男爵は、王と王子から直接依頼を受けたらしい。

この国を護る手段は無いかと。

いい知恵を出してもらえるのであれば、戦争が終わった後で必ず報いると。

そして初代カミジール男爵は、幾つかの報酬を望みそれに応える。その報酬は、現在のカミジール男爵領を納めさせてもらいたいと言う事、各地に散らばっている仲間を仕事の後で集めさせてもらいたいと言う事、そして自分たちが間諜だという事実を広めないでほしいと言う事。

王は、それを快諾した。

そして初代カミジール男爵は、戦争までの短い間で集められるだけ自分の仲間を集め、シンクレア傭兵国との戦争を行う事になる。

公式の資料では、その戦いは抹消されている。

事実、乗せられない戦争だったのだ。

戦争の規模は、シンクレアの先遣隊二千兵に対し、カミジール男爵の私兵が百名。

当時、まだシンクレアと繋がる街道はまともに整備されておらず、荒れ放題で、完全に山道だったらしい。

その街道と、街道を有していた山が。

立った三日で、シンクレア傭兵国の兵士たちの血で染まった。

カミジール側に一人の死者も出さず。

国境を超える事も出来ず。

シンクレア傭兵国の兵二千名は、死に絶えた。

侵略開始から四日目の朝。

アークジュエルへと続く山の入口に、二千個の生首が曝され、シンクレアは大騒ぎになったらしい。

調べた結果、戦場がアークジュエル王国領内ではなく、シンクレア傭兵国内だったのだ。

自分たちのフィールドで、惨敗したのだ。

それも、正体不明の部隊に。

シンクレア国王は再度の派兵を行おうとしたのだが、派兵を決める会議の前日に暗殺された。

無論、行ったのはカミジールの手の者だ。

シンクレア王以外にも派兵を推進していた貴族たちは、全て暗殺された。

そして派兵反対派の力が強くなり、その戦は終わりを告げる。

アークジュエル側でその戦を知っていたのは、時の王とその王子、そして三公だけ。

歴史に刻まれぬ戦い。

その戦いの後、アークジュエル王国はシンクレア傭兵国と話し合い、それまで半分ずつ所有権を持っていた両国を隔てる山の所有権を全てアークジュエル王国の物とし、そこをカミジール家に与えたのだ。

そして歴史書に残っている通り街道の整備を行い、山の所有権を交渉で奪った事も含めて柄とし、カミジールは男爵の地位を貰う事になる。

以降カミジール家はシンクレアからの侵略を全て山中で食い止め、アークジュエルの市街地には一步も侵入させなかったという。

「王との約束通り、初代は自分の領地に仲間を集めました。間諜の仲間を。そして仲間は領民となり、カミジール男爵領は急速に間諜教育機関として成長していきます」

「……それは、今も？」

「ええ。現在もカミジール男爵領では間諜の教育を行っており、領

民の全てが間諜と言って差し支えない状況になっています」

「そ、そこまでなのか」

カミジール男爵領の人口は、確か一万人。

その全てが間諜の能力を持っていると言う。

「……だから、口外出来ないんですね？ それだけの力を持っていると他の貴族に知られたら、内紛が起きるかもしれないから」

「流石カイル様。その通りです」

「……どういう事だ？」

「つまりですね、キースさん。もしキースさんの隣の家が全員間諜だとしたら、キースさんはどうします？ 何十年も前から隣に住んでいた人たちが間諜であると、ある日突然知ったとしたら」

「……気味が悪いな。全て何か調べてるんじゃないかと思ってしまうかもしれない」

「そう、つまり嫌がりますよね、隣にいるのを。そして疑いますよね？ 自分の事を洗いざらい調べられているのではないかと」

「……あっ！」

「ええ、そう言う事です。シンクレアとの国境を治める貴族がとても大規模な諜報機関であると知れば、絶対に良からぬ事を考える貴族が出てきます。勝手に疑心暗鬼に陥ったりして、その挙句に兵を出したり、あるいはシンクレアと手引きしてカミジール家を潰そうとするかもしれない」

「さらに言えば、領民が貴族の利権争いに巻き込まれる可能性が非常に高くなります。カミジールの願いは、安定した平和な生活を送る土地を得ること。過去に流浪し定住せず過ごした経緯から、安定志向が強いんです」

だから、無駄な争いをしたくないとイーリスは言う。

「以上が、カミジール家の正体です。余談ですが、私はカミジール家にある間諜育成機関の長をしています」

「そ、その若さですか!？」

「ええ、はい。それまでは父が就いていたのですが、とある事情でそうなっています」

そりゃすごいな、と感心した面持ちのキース。

その様子を見ながらカイルは頭を抱えたい気持ちになった。

たった十六歳で教育機関の長という事は、イーリスはとんでもない才女という事になる。

そしてその才女の秘密を、カイルたちは知ってしまったわけだ。

そりゃすごい、の言葉で済ませられるほど、この事実は軽くない。

(なるほど……。それで、殿下との婚姻は望んでいないのか)

納得する。

如何なる理由でまだ少女と言っているいいイーリスが教育機関の長をやっているかは分からないが、しかしそれでも長を任せられているのだ。

それを、王子の妃という立場とはいえ、送り出すのは難しいのだろう。

イーリスには二人の姉がいると読んだ資料にはあった。

推測だが、イーリスは姉二人よりも優れているのだろう。

事、間諜の能力という部分においては。

「私が正妃を望まないのも、いざという時に素早く動けるようにするためです。王族に名を連ねては自由に行動できなくなる、というのも理由としてあげられます」

「……いざという時、とは？」

「陛下や三公が私たちの存在を広めた時、です」

「……その時は、どうすると?」

「古の契約では、わき目も振らずに逃げ出す、とありますね。この国を捨てて」

イーリスの話では、カミジール男爵領の住民全てがその心構えを持っていると言う。

以前聞いた話にはなるが、カミジール男爵領家の領民たちの生活は非常に質素なのだそうだ。

着るものも、家具も必要最低限。

誰もかれも贅沢を行わないらしい。

それは男爵家も変わらず、貴族としての立場からか最低限の贅沢は行っているようだが、他の貴族から見ればそれは質素すぎると言っ
って過言ではないらしい。

いつでも動けるように。

いつでも逃げ出せるように。

明日この土地を去る事になっても問題が無いように。

かの土地の人々は、それを胸に生活している。

(根づいて欲しいと思うのは……。きっと我儘なんでしょうね)

思い、小さく息を吐く。

いつでも居なくなっても良いようにというのは寂しいと。

カイルはそんな事を思いながら、ぎゅっと手を握りしめた。

諜報機関カミジール（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

これでカミジール家についての大まかな説明は終わりです。後は、次章につなぐ中身と、そろそろ真面目に恋愛ものであるという事を意識して物語を紡ぐための部分を書く予定。

これまでは完璧に見える演技とか実力を見せているイーリスですが、このあとからはボケた行動などが多くなるかもしれません。

きつと調子がくるっていくんだと思います、ええ。しっかりラブストーリーしてもらわないと。

それでは、また次話でお会いしましょう。

ありがとうございました。

忍姫に自覚無し（前書き）

第十一話をお届けします。

今日は幸い休み……なのですが午前中も夜も出かけたりなんだりと用事があるので、朝に更新です。

とりあえず今回で説明会は終わり。次話からは本格的にストーリーを進めていく予定ですが、やはりプロットも何もないので先行き未定。

プロット作ればいいじゃないかという声が聞こえてきそうですが、作ってしまうと勢いがなくなる気がするんですよねえ。

困ったことに。

なにはともあれ、第十一話をお楽しみください。

忍姫に自覚無し

「……とりあえず、これが私たちの秘密です」

「アークジュエル最大の諜報機関、か。馬鹿げていると言いたいが……本当なんだろうな。昨日の事を思うと」

「キースさんが気づけなかったんでしたっけ、懐に入られるまで」

「ああ。頭に血が上っていたと言うのも理由の一つだが、それを差し引いたとしてもまったく気がつかなかった。イーリス嬢が止めていなければ、俺は死んでいた自信がある」

「嫌な自信ですね……。今はいませんが、あの侍女さんも間諜、なんですよね？」

「ええ。アイリスは私の護衛を務めていますし、今は暫定的に王都にいる者たちを統括する立場にあります。今は城内で情報収集に動いていますよ……と、戻ってきたみたいですね」

イーリスのその言葉に、キース共々疑わしげに入口を見る。
意識を集中して見ても気配がまるで感じられないからだ。

「お嬢様、ただ今戻りました……た？ キース様もカイル様も、如何なさいました？ ドアをじっと見つめていらしたようですけど」

「本当に戻ってきた……」

「我々が未熟なんでしょうか……」

「伸ばしてきた場所が違うだけだと思いますよ？ あれでもアイリスは優秀な間諜ですから」

「……？ その、私が何かしたのでしょうか、お嬢様」

「いいえ、大丈夫。さて、キース様にカイル様。今までの話を知った事で、お二人には今度カミジール家の縁者になってもらう必要があります。具体的に言えば、婿に来ていただきたいんですけれども」

その言葉に、キースと揃って息をのむ。

婿。

家を出る事になる、と言われた時からそれは想像していたが、改めて言われると破壊力があると言うべきか。

（イーリス様の婿に……ですか。それは良いのですが……二人とも？）

「婿について……イーリス嬢の夫として？　それも二人とも？」

「まさかっ！　キース様、何をおっしゃってるんですか」

「そうですよ、キースさん。流石に夫を二人持つなんてそんなことは」

「そうですよ。私が言いたいののは、フェリス姉さまと妹のシェリスの夫として、カミジール家にいらっしゃいませんか、という事で」
「……は？」

男たちの声が揃う。

どういう事かと視線を先ほど戻ってきた侍女に向けるが、視線があっても疲れたような様子で首を振るばかり。

「あ、丁度二人の写真がありますから、見ていってください。シェリスは流石にまだまだ幼いですが、将来有望ですよ？　絶世の美女になる事間違いないですっ！」

ほらほら、と嬉しそうな、生き生きとした様子で写真を見せるイーリスに、男二人は引いていた。

「まさか……イーリス様は、既に意中の相手がいるとか？」

「いや、だったら殿下の正妃候補として上がる事は無いはず……」

「いえ、でもどうやら情報操作していたようですし、最初から正妃になるつもりが無かったと言っていますし……」

「……直接聞いてみるか」

顔を寄せ合ってヒソヒソと小声でやり取りをする。

少し特殊な趣味趣向を持つ令嬢たちが見れば垂涎の光景がそこにはあったが、幸いにしてその特殊な趣味を持つ者はここにはいなかった。

「その、イーリス様？ 少しお聞きしたいのですが」

「はい？ なんでしょうか」

「その、イーリス様は既に意中の相手がいらっしゃるんですか？」

「は……？ 意中の相手、ですか？」

「ええ。こうして今回は殿下の正妃候補として王城に上がられていますけど、本当はもう将来を誓った相手がいるとか」

ぱちぱち、と瞬きをするイーリス。

まるでそんな質問は想定していなかった、という顔だ。

「いえ？ 別にそういう相手はいませんが……。それがどうかしました？」

「でしたら、僕たちが婿に入る相手はイーリス様でもいいのでは？」

「あはは、そんな御冗談を。私よりも姉さまやシェリスの方がお二人にはお似合いですよ？ ほら、見てください。まだまだシェリスは幼いですが、こんな愛くるしいんですよ？ 順調に育っていますし、きつと数年後には誰も放っておかない美少女になる事間違いないですよ？」

見せられた写真に乗っている少女は非常に愛らしい容姿をしている。

イーリスがここまで進めるからには性格も良いのだろう。

姉のほうも、確かにイーリスと比べれば姉に軍配が上がるのは間違いない。

あくまで、容姿だけを見るならば、だ。
だが。

「その、出来れば僕は……。カミジール家に入るならば、イーリス様の婿として入りたいのですが」

「ああ、俺もそう思う」

「……はえ？」

「お嬢様、お嬢様、声が間抜けですよ？」

「……はっ、え、ええつとですよね？ その、私の夫として、ですか？ 嫌ですねえ、そんな冗談を」

「……お嬢様、その、お二人とも非常に本氣の目をしていらっやいます。きつと冗談ではないですよ？」

「……………えう」

従者の言葉に、イーリスはキースとカイルの顔へ視線を動かした。そして言われた通り目に本氣の色が混ざってるのを確認すると、少しだけ頬を赤くして困ったような顔をする。

愛らしい。

「……楽車の術？ それとも喜車の術？ いえ、それにしては二人とも目の色が本氣だし……。でも、私なんかを妻にして利点は無いはずだし……。ああ、私の地位……？ でもそんなものはカミジール男爵領だけの地位なわけで……」

小声でぶつぶつと呟きだす。

その内容が全部聞こえたわけではないが、しかし此方を疑っているらしいのは分かる。

キースと視線をからませて、もう一度意志を伝えようとした所で――タイミングを外すように侍女が言葉を挟む。

「お嬢様、そういえば急ぎで耳に入れておきたい話があります」
「そうよね、だからきつと何か意味があつて――え？　何かしら、アイリス」

「時期はまだ正確には分かりませんが、近く現在正妃候補で有力視されている方々を暗殺しようとしている動きがあります」

「なっ――！？」

息を飲む。

少しだけほんわかとしていた空気が、侍女からの報告で一気に引き締まる。

イーリスも表情を真面目なものに戻し、あごに手を当てながら鋭い目で従者の言葉を吟味している。

「……どこからの情報？　主犯は誰？」

「正確には分かりませんが、中心となっているのはアヴァン法務大臣のようです。情報は、大臣の家にいる鼠からです」

衝撃の情報がもたらされた後。

とりあえず陛下に報告してきます、と言ってイーリスは部屋を出て行った。

その姿を、この部屋に残っている侍女とまったく同じにして。

侍女——アイリス曰くイーリスは変装も達人なのだそうだ。
声までも同じに出来るらしい。

「それにしても、暗殺か。法務大臣も思い切った事を……。」
「現在有力視されているのは、三公や大将の娘だというのに、ですね」

「……お二方。この部屋以外でその話題は出さないようにお願いします」

アイリスの言葉に、分かったと頷く。

それだけ、機密度の高い情報だったのだろう。

それを教えてもかまわないと認識されているのは、素直に嬉しいが。

信用の証と捉えられるから。

「まあ、もし口に出したらその場で命が無くなると思ってください」

「……………言葉もないですね」

「ああ…………」

信用等などではなかったというか。

「あ、いえいえ、勿論お二人は信用していますよ？　ただ、万が一があるので、釘を刺させて頂いただけで。それに、信用していただければお嬢様が大事な家族の婿に、などとは考えませんよ」

「あ、そうです、その事で貴女に聴きたい事があるのですが」

「……お嬢様のあの態度についてですね？」

「はい。……あ、いえ、勿論言えないのであれば無理には」

渋面を作るアイリスの姿に、踏み込んではいけなかったかと言葉を付けたす。

しかし、いえ、と首を振った後で彼女は口を開いた。

「キース様も、カイル様も、お嬢様を気にかけて頂いてありがとうございます。ございます。カミジール家の使用人を代表して、お礼を申し上げます」

「い、いえ。そうまで言われるほどの事では」

「ああ。俺もカイルも、イーリス嬢を気に入ったからああ言ったんだ」

「ふふ、ありがとうございます。しかしお嬢様はあの調子ですので、その、地道にしていただけと……。色々ありまして、自己評価が低い方ですので」

「色々、とは？」

「それは従者の身では口に出せない事でございますから。お知りになりたければ、イーリス様の口から直接お願いいたします」

「……わかった」

カイルも分かりました、と頷きを返す。

「でも、私たち使用人一同はお二人の事を応援していますので！是非とも、どちらかの方がお嬢様の伴侶になっていただければ、本当に嬉しいんです」

「はい、わかりました……。というのも少し変ですけども。何とかイーリス様に振り向いてもらえるよう、努力してみます」

「俺もだ。カイルに負ける気はしないけど、それでも……。やっぱり、実際あった事が無い相手よりはイーリス嬢と一緒にになりたいかな」

自分だってキースに負けるつもりはない。

もっとも、態々それは口に出さない。出さなくても、此方の気持ちには分かっているだろうから。

「……お嬢様にはもったいないくらいのお言葉ですねえ。その、参考までに、お嬢様のどこが気に入られたのかお聞きしても良いですか？」

「……そうだなあ。俺は、あの度胸と胆力が気にいった、かな」

「度胸、ですか？」

「ああ。話を聞いて改めて度胸があるとは思ったが、やっぱり昨日の一幕だ。俺がイーリス嬢を意識したきっかけは。ある意味、一目惚れと言っても良いかもしれない」

「昨日で、度胸というと……。キース様が剣を突きつけていた時のことですか？」

「ああ。あの時……。イーリス嬢は、まったく恐れていなかった。俺の剣を。怯えた演技をしながらも、真っ直ぐ俺の目を見ていたんだ。だからこそ疑惑を深めたし、殺気も出してしまったんだが」

「……そんな事になってたんですねえ、あの時は」

「そえでも。普通の女性なら……。いや、男でも新兵レベルだったら恐怖で硬直するような物をぶつけたにも関わらず、彼女はその目の色を変えなかった。そして、あの一喝だ」

「私を止めようとした、ですね」

「ああ。正直、心が震えた。元帥と陛下以外に、唯の一喝で魂が揺さぶられたのは彼女だけだ。無条件で膝を吐きたくなくなるような、そんな威厳があった」

「……女性に威厳なんて言っても喜ばないと思いますけどね、僕は」

「うるさいぞカイル。まあ、そう言うわけで……。昨日の一件で、

俺は彼女を気に入っている」

なるほど、と頷き、アイリスは視線をカイルへと向ける。

「僕ですか？　僕は、昨日説明を受けている時のイーリス様の目がとても美しく輝いていたので……。キースさんじゃないですが、あ

る意味一目惚れですね。それまでの印象が良くなかった所から、あそこまで鮮烈で凛々しい真実の姿を見せられたんです。一気に印象が変わりました」

「……お嬢様も罪作りですねえ」

「まったくもって。まあ、そう言うわけで……。戦略遊戲の時から気に放っていたんですけどね」

「あ、そういえば……カイル様だったんですか？ お嬢様が戦略遊戲でしていた事を見抜いたのって」

「ええ。後でキースと話した所、キースも途中から手が少しおかしいと気づいていたようでしたから、元帥と参謀長、そして父に相談してみました。勿論、お三方の戦略遊戲とは伝えずに、ですが」

「なるほどなるほど。ふふ……それで、どうでした？ お嬢様の手は」

「そうですね……。率直に言えば、全力がどこにあるのかを確かめてみたい、とは思いました」

きっと、知略の限りを尽くした戦いが出来るのだろう。

その事を想像し、頬を緩ませる。

「はあ……。綺麗に微笑まれますねえ、カイル様。大丈夫です、その頬笑みならきっとお嬢様も陥落させれますっ！」

「陥落って、お前な。主だろうに」

「仕方が無いじゃないですか。お嬢様はそりやもう強引にでも愛されているという自覚がわからない限り、そして自分から好意を持たない限り、一生独り身です。ええ、昨日本気でそんな事言っていましたし」

「本当か！？ それはまったく……。難敵だ」

「そうですね……。お互いに頑張りましょう、キースさん。負けません」

「そりゃ俺もだよ、カイル」

そんな風に笑いあう。

アイリスも一緒になって微笑んだりして。

その後も普段のイーリスについてアイリスに質問などをしていると――不意に勢いよく、ドアが開いて閉められた。

「お、お嬢様！？　どうしたんですか、そんなに息を切らして！」

入って来たのは、部屋の主であるイーリス。

アイリスそっくりの顔をして、アイリスと同じ給仕服を着ているが、それはイーリスだ。

「はぁ、はぁ……。アイリス、ごめん」

「は、はぁ。えっと、何がでしょうか」

「……殿下に、口説かれてしまったわ。貴女の顔で」

沈黙が降りる。

イーリス以外の全員が一樣に疑問を浮かべ。
同時に納得し。

「口説かれたぁ！？」

声を揃えて、その言葉を反復した。

忍姫に自覚無し（後書き）

お読みいただきありがとうございます。ご感想、お待ちしております。
ます。

明日更新できるかは少し未定ですが、第一部に当たる話が終了したので、一度過去の物語を見直して加筆修正を行う予定です。
更新はその後になるかと。

連日更新はストップしてしまうかもしれませんが、どうぞ気長にお待ちいただければと思います。

それでは。

お手付きという文化（前書き）

お待たせしました、第十二話です。ええ、本当にお待たせしてしまいました。

修正を入れ始めたり、はまたま友人から勧められた「やる夫」シリーズにはまったり、シャイニングハーツを遊んだりとで色々時間がなく、執筆を後回しにしていました。

自業自得ですね、申し訳ありません。

今回から一文ごとに一行空白を開けています。

理由は読みにくいかなあ、と思ったから。

これ以前の話についても、修正が完了次第同じ様式にしていくつもりです。

それでは、お楽しみくださいませ。

お手付きという文化

王の執務室がある階層の廊下を、アイリスの姿を借りたイーリスは歩いていった。

カムフラージュの為のティーセットをカートに乗せて押しているその姿は、どこからどう見ても侍女であり、正妃候補の一人だとは分からないだろう。

実際、ティーセットをキッチンに借りに行った時も、誰ひとりイーリスがアイリスに化けている事に気がつかなかった。

気づかれるような変装をしていては、忍失格だが。

なんにせよ、法務大臣が正妃候補を暗殺しようとしているという情報は伝えた。

王からの指示は追って出されると言う事だったが、それまでに有る程度独自で情報を収集しておいた方がいいだろう。

（となると……まずはシアニーとヘキサに繋ぎを取るか）

どの間諜と連絡を取るのかを考えつつ、イーリスはコックに化けているシアニーに会うために足を進めていく。

余談だが、ティーセットを受け取りに行った時、シアニーもこの

アイリスがイーリスだと言う事には気が付いていなかった。

（気配察知と見破りの特殊訓練に参加させないと）

本人が聞いたら絶叫後に泣いて喜ぶような事を考えるイーリス。

「それにしても……。面倒な事をしてくれるものね、法務大臣も」

王宮の庭師として潜り込んでいるヘキサに当たる指示等を考えながら、イーリスは小声で呟いてため息を吐く。

やりきれない。

自分の娘があつさと正妃候補から外されたからと言って、他の候補者を害しようとするなど、短絡的にも程がある。

けれど。

「どう考えてもそれ以上の裏がありそうなのよね……」

困ったものだ。

現状手に入っている情報は、法務大臣が残っている正妃候補を毒殺しようとしている、というそれだけ。

それ以上の情報を集めるためにも、情報収集の密度を上げねばならない。

悩ましい事、この上ない。

正直面倒だが、この情報を伝えた時に王から直々に命を得てしまっている。

『法務大臣の意図を探り、毒殺を阻止する事』

その命を果たす為にも、迅速に事を進める必要がある。

「並行して殿下の令嬢嫌いを直さなければならぬとか……。お父様に依頼して、手を増やす事を考えなくちゃならないか」

その為の手紙をまた書かなくてはいけない。

やる事は山積みだ。

「……ふう。………ん？」

声が聞こえる。

「……良いだろう？ お前も、それを望んでいると思っていたが」

「で、殿下……その、今は正妃をお選びになる大事な時期で……」

嫌な予感がするが、殿下という単語が聞こえた以上動かねばなるまい。

正直、面倒だが——法務大臣がキナ臭い動きをしている状況だ。

どういう方面から王子に危害が加わるとも分からない。

気配を消して、声がする方へと忍んで行く。

床に絨毯が敷いてあるのが幸いし、ティーセットが乗ったカートを押す音が響かないのが丁度いい。

「だからこそ、だ。どうにも目が厳しくてな。だからこそこうして自由になれる時間は貴重なんだ。大丈夫、一刻もあれば済む。侍女長には俺から言っておくから……」

「で、殿下……」

何をやっているのだろうか、あの王子は。

忍んでいる先に見える光景に、イーリスはため息を禁じえない。

そこには、侍女を壁に追い詰め口説いているレンフィールドの姿があった。

お手付き、という文化がある。

王族だけに許された行為で、簡単に言えば王城勤めの侍女に手を出す、公認の火遊びだ。

王城に努める侍女は、大抵が准貴族の娘たちだ。

准貴族は貴族とはいえ、この国では力が無い。

平民以上貴族未満という非常に中途半端な位置にいる。

だからこそ、出会いを求める。

より強い貴族と。より地位の高い貴族と縁戚関係を結ぶために。

その為、何時からか准貴族は自分の娘を王城の使用人に、上げる風習が出来たのだ。

王城には力ある貴族が集う。

その王城で働いていれば、自然とそういう貴族の子とお近づきになれるという仕組みである。

ちなみに准貴族の男子は、ほぼ例外なく騎士団へと入団する。

騎士団は完全な実力主義であり、本人の実力次第では高い地位を得られるからだ。

アークジュエル王国で行う戦闘は、ほぼ例外なく侵略者から国を護る防衛戦である。

その防衛戦で手柄を立てるか、定期的に行われる武術大会で上位に入賞する事で地位が上がる。

貴族の子といえど最下層される事は無く、実力が無ければ何時までも一兵卒であり、准貴族の子であろうと実力があれば若くして将校の地位を得る事が出来る。

将校まで登りつめれば、場合によっては爵位を与えられる事もあるのだ。

余談だが、騎士団は一般市民でも入る事が可能である。

准貴族の中には一般市民から成り上がった者もあり、その大半が騎士団で頭角を見せた者たちだ。

（そして城で働く侍女たちが自分の価値を高める手段がお手付き、か）

王族が手を出した、という事はそれだけ女としての価値が高いと言う意味を持つ。

箔がつくのだ。

アークジュエル王国では、別に処女性という物をそれほど神聖視していない。

無論王族に嫁ぐ女に当たり前の条件としてそれは求められるが、一般の貴族に関してはそれほど重要視していないのだ。

むしろ男を知っている方が喜ばれる事すらある。

無論個人の好みとして処女が良いという者もいるが。

そして王族と関係を持った女というのは、その女を嫁に迎える貴族側にも一種のステータスとして扱われる。

『王族が気にいった女を自分のモノにする』

という一種の征服欲が程良く満たされるからだ。

だから、女側もお手付きになった事を隠す事はそうない。

よほど引っ込み思案か、周りに強い嫉妬をする者がいなければむしろ誇らしげにする事すらある。

もったも、これも風潮としてあまり積極的に吹聴するのは好まれない。

自然と噂で流れるからだ。

そして侍女たちはお手付きになった事を付加価値として貴族に嫁ぎ、縁戚関係を結ぶ事を夢みるのである。

地位の高い貴族に嫁げば、自然と裕福な暮らしを出来るし、夢のような生活が待っているわけだ。

女達も必死になる。

だが。

しかし、である。

（レンフィールド殿下がお手付きを割と積極的にしている、というのは情報として上がってきていたけれど……。こんな状況でそれをする！？ 普通）

信じられない。

正妃を決めるという状況の中、平然と他の女に手を出すその感性が信じられない。

別に一人の女を真摯に愛せというつもりはない。

王族の責務として子を残すというものが最重要課題としてあげられている以上、複数の女性と関係を持つのは義務とすら言える。

だが。

自分の正妃を決める大事な時期に、その正妃候補ではなく侍女で性欲を満たすとは何事か。

正妃候補へ渡り――夜這いを駆ける事は禁止されてない。

むしろ氣にいった相手がいれば積極的に夜這いしてしまえばいいのだ。

イーリスは御免こうむるが。

無論、それを受けるか受けないかを決める権利を女性側は持つ。

権力をかさにきた強引な男女関係は、過去に起こった事件により法によって禁じられているからだ。

だから、女を抱きたければ正妃候補を抱けばいいのだ。

それが理にかなっている。

だと言うのに。

（それも、あれは……。よりもよって法務大臣派に属する准貴族の娘って……）

間が悪いにも程がある。

イーリスの中でレンフィールドの評価ががたと下がっていく。
本当に、これが次の主になるのだろうか。

場合によっては、リンスミートが王位を継ぐ方がいいのかもしれない。

そんな事を真剣に考えている中、王子による口説きは続いている。

「……ダメ、か？」

「……………っ！」

顔が近い、顔が近い。

見た目は相当に美形なのだ。あんなに至近距離に顔を寄せられ、甘い声でささやかれてくらくらこない子女はいないだろう。

特殊な訓練を受けていれば別だが。

ともかく、今はマズイ。

これが例えば三公の派閥に属する准貴族の娘であれば問題は無かったが、法務大臣の派閥というのがマズ過ぎる。

気は進まないが、邪魔をするしかないだろう。

これがハニートラップではないと言う証拠など、無いのだから。

あそこで王子の口説きに呆けている侍女には悪いが――タイミ
グが悪かったと諦めてもらおう。

ティーセットの皿を一つ取り、床に落とす。

ガシャンツという破砕音と共にカートを進め、王子たちから自分
の姿が確認できるようにする。

「っ!？ 誰だっ!」

「……っ!」

誰何の声が飛ぶ。

びくりっ、と身体を震わせ、狼狽する仕草をしながら顔色を操作。

蒼白になる演技を行いながら、申し訳ありませんと叫ぶように言
って頭を下げる。

「で、殿下。その、私はこれで……。失礼しますっ!」

「え？ あ……。っ、行ってしまったか」

タイミングが外された事で我に返った侍女が、臣下の礼を取って
足早にその場を去っていく。

それを名残惜しそうに見送ったレンフィールドは、その眦に怒り
の感情を表しながらイーリスに近づいてくる。

「……次からは気を付けるように。後今の事は他言するな——む？
お前は……」

「も、申し訳ございませんでした！」

相手が近づききるまでに手早く割った皿を拾い上げて片づけを済ますと、頭を下げてひたすらに相手の愠気が収まるのを待つ。

ここで下手に動くのは、アイリスの——侍女の作法ではない。

王族相手に自主的な動きをするのは、先ほどのようにお手付きになる事を誘われた時にことわる時くらいのものなのだ。

「……顔を上げろ」

「は、はい」

アイリスを演じながら顔を上げると、そこには真っ直ぐに自分の事を見つめるレンフィールドの顔がある。

改めて間近で見ると美形だが、正直イーリスの好みではない。

イーリスの好むのは強い意志を宿している顔だ。

自分の理想を強く持ち。

自分の夢を強く持ち。

常に向上心を忘れず。

誇りを胸に抱き。

強き意志で前進し続けるような、そんな志が表れる顔こそが好きなのだ。

王子の顔はそれではない。

ただ美しく、ただ鋭いだけの、観賞に耐えうるだけの顔だ。

少なくともイーリスには、そうとしか見えない。

次王としてこの国をどうしようと言う強い意志が――欠片も感じられない。

惰性でいるだけの、王子。

「お前は……カミジール男爵令嬢の侍女か。仕えている主と同じ黒髪黒目だったからよく覚えている」

「は、はい。仰られる通り、私はカミジール男爵令嬢、イーリス・ミル・カミジール様の侍女をしています」

「……名は？」

「アイリス・ダージリンと申します、殿下」

「女子でミドルネームが無いと言う事は准貴族か、あるいは平民か」

「准貴族の娘でございます」

「……ふむ。なるほど。そう言えば、まだ黒髪黒目の女を抱いた事が無かった、な」

目の前で呟く王子。

何を言っているのだろうか。

嫌な予感がぬぐえない。

いや、これは予感というよりも次の言動がほぼ確実というレベルで予想できるからこそその感情だろう。

つまり、この王子は。

「……あの娘の代わりに、お前を抱くのもいいかもしれないな」

「なっ——！！？」

イーリスを、お手付きしようと言うのだ。

「顔も悪くない。あの主に仕えるのは疲れるだろう？ 聞けば我儘ばかりで、お前にも辛く当たっていると聞く」

余計な御世話だ。

全部演技だと、ここで暴露してやりたい衝動に駆られる。

「どうだ？ そんな仕え甲斐の無い主の鼻を明かしてやりたくはないか？」

「ど、どういう事でございますか……?」

「ふふ……主よりも先に俺に抱かれて、主の顔をつぶす気はないか、と言っている。何、安心しろ、その場合お前をカミジール家から引き抜いて俺の専属にしてやろう」

何を言っているんだろうか、この王子は。

予想通りだが、しかし予想の斜め上を言っている。

よく覚えていないが、もしかして今まで粉をかけるのに失敗した事が無いのだろうか。

……無いのだろうか。王子だし。

だが。

無論ここで肯定するのは、ない。

それはイーリスがアイリスの変装をしているからというわけではなく、本物のアイリスだったとしてもありえない。

この王子は、侍女の矜持を――なめた。

「……殿下」

「なんだ? アイリス」

「確かにイーリス様は気が短い所が御有ります。感受性が高いお方です。それを不満に思う事もございます」

「そうだろう？ だから――」

「しかし。私は、カミジール家に奉仕している侍女です」

王子の言葉を無理やり遮る。

相手の目を真っ直ぐ見、意識して表情を消し声の抑揚を無くす。

怒りの演技だ。

「カミジール家にご恩があり、身命を賭して奉公する身。その私が主を――カミジール家を裏切るまねをする理由がございませんし、必要がありません」

「な、に？」

「お手付きのお誘い、お断りいたします。それでは、失礼します」

言いたい事だけを良い、カートを押してその場を去ろうとする。

もう、正直この場にいたくない。

戻ったら再度王子に関する情報を集め直す必要があると思いながら足を進めていると、後ろから腕を掴まれる。

避ける事も出来たが、それは不自然なので辞めてされるがままに。

腕が痛い。

握る力が強すぎる。

この点も、減点だ。

力で女を捉えるなど、減点も良い所だ。

「待て」

「お放しください、殿下。他言は致しませんし、イーリス様へも告げる事は致しません。戻るのが遅くなると、叱られます」

「待てと言っている。カミジール男爵令嬢には私から言うておく」

「必要ございません。お手付きは、双方の合意でのみ行われる事だったと記憶していますが」

「違う」

此方が顔を向けないと悟ると、あちらから回り込んで視線を合わせてくる。

心なしか、その目に熱が宿っている気がする。

嫌な予感が止まらない。

「……カミジール男爵令嬢の事を抜きにして、お前、本気で俺の侍女にならないか」

「……不遜ですが、お断りいたします」

「気にいったんだ。男爵には俺から話をつける」

「男爵からの命令であれば従いますが、すぐにお暇を頂きます。私が使えたいのはカミジール男爵家であって、アークジュエル王家ではございません故」

「……その意志の強い所が気にいったんだ。絶対に——お前を、俺のモノにする」

「お断りいたします。私は誰のものでもなく私の物です！」

アイリスをトレースしている事を抜きにしても、自分のモノにするなどという発言は気に食わない。

自分は自分だけのものであり、自分だけが最終的に自分の主であるべきだ。

自分の主たる自分が認めているから、他者の命が受け入れられるのだ。

誰にも依存せず、誰にも直接従わず、己の主たる己が従う事を決めた相手にのみ従う。

観念的な思想だが、それがカミジールに代々続く不屈の意志だ。

「……お話が以上でしたら、私はこれで失礼いたします。……腕が痛いので、お放しただきたく」

「あ……す、すまない。だが——」

「御身の前ではしたない真似を致しますが、失礼いたします、レン
フィールド殿下」

カートを押し、早足で逃げる。

背中に背負うのは拒絶の意志だ。

可能な限りの早足でその場を去り、急ぎキッチンへ食器を戻して
自室へ帰る。

そして、はたと思います。

「私もしかしなくても、ア、アイリスの姿で口説かれたの……？」

やらかしてしまったようだ。

ああ、アイリスにどう説明したものか。

本当に——面倒だ。

お手付きという文化（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

王子、自分の株を下げるの巻。

たぶん登場している男性キャラクターの中で、ぶっちぎりで評価低いんじゃないでしょうか、王子なのに。

イーリス、マジばねえ。

にゃんまげ様、みかんブルー様、双葉様、ひよ様、感想ありがとうございます！

今日はもう気力がないので、朝にでもお返事書かせていただきますね！

それでは、できれば今週中にもう一話更新できればいいと思いますが

感想、お待ちしております。

全てはカミジールの手の上で（前書き）

何とか今週中に更新できました。

よかったよかった。

今回は前回の顛末を話してどーなったか、というのと舞台の裏側を少しだけ。

展開が遅すぎて泣けてきます。

それでは、だい十三話、お楽しみください。

全てはカミジールの手の上で

「……………」という事があったの」

「殿下……」

「兄上……」

「イーリス様、そのお気持ちはわかるのですが……」

イーリスの部屋にて事の顛末を話し終えると、三者三様の反応が返ってくる。

カイルは頭痛を堪えるように頭を手で押さえ。

キースはふかぶかとため息をつき、思わずレンフィールドを兄と呼び。

アイリスはイーリスをたしなめるように嘆息した。

「とりあえず、あの様子だと今後もアイリスに粉をかけようとするでしょうね。鬱陶しい事この上ないわ」

「イーリス様、その……はっきりと言いすぎのような気がするのですが？」

「この場で体裁を取り繕う気はもうないですよ、カイル様。どちらかと言えばこれが私の素ですし」

「いえ、そう言う意味ではなく……」

そう言いながらカイルは視線をさまよわせる。

その視線の先は、間諜達が隠れている場所だ。

「全員気配隠蔽の訓練ね。この一件が終わったら里帰りの申請するように」

「……っ!？」

「イーリス様？ その、ものすごく悲痛な気配がするのですが……」

「そうだ、俺も気になっていたんだが……。この部屋を見張っている間諜達はいいのか？ 王に三公しか知ってはいけないんだろう？ あの秘密は」

「ああ、それは問題ないですよ、キース様。ここにいるのは全員カミジールの息がかかった者たちですし」

「————は!？」

「いえ、ですから。そんなに驚かれなくてもいいじゃないですか、キース様」

「い、いえしかし……。そう言われれば納得もできるのですが、こ

の部屋にいるのは全てイーリス様の配下なのですか？」

「それは少し違いますね。この部屋にいる間諜達は、陛下と三公、後王子たちの配下の者たちです」

「お嬢様の配下、というわけではなく、諜報機関カミジールに属する者たち、という表現が正しいかと。だから彼女たちがカミジール家の不利になるような報告は致しません」

「アイリスの言うとおりです。だからお二人ともこの部屋の中ではどうぞ気楽に発言してください。あの子達は優秀なので、しっかりと渡す情報の取捨選択は行いますから」

「無論陛下たちに仕える者として渡せる情報は全て渡しています。ただ、二人の王子殿下に関しては虚偽の情報を流す様に指示しますが」

カミジール主従の言葉に二人の近衛騎士は言葉が出ない。

それでも頭痛を抑えるような仕草をしながら、カイルは疑問を口に出す。

「参考までにお聞きしたいのですが……。この国に、カミジールの息がかかっていない者たちはどれほどいるのでしょうか？」

「……………何と言うか、流石ですね、カイル様。そう思わない？
アイリス」

「はい、お嬢様の偽装を見破ったというのも深く納得できます」

「……どういう事だ？」

「それはですね、キース様。カイル様は、これまでの遣り取りで気づかれたのです。アークジュエル王国内に、カミジール家の影響力がどれほど深く根付いているのかを」

「どういう事だ？」と首をかしげるキースに、どこか興奮した様子でカイルが説明を始める。

「いいですか？ キースさん。本来、陛下や三公の子飼が仕えている主以外の影響を受けてはいけません。それは分かりますよね？」

「ああ。特殊な場合を除くが、二君を持つのは裏切り以外の何物でもないしな」

「ですが、それが成り立ってしまっている。それもこの国の重要人物の配下で、です」

「……そうか。この国の中枢の子飼がカミジールの配下にあるという事は――」

「ええ。この国でカミジールの影響を受けていない個所が少ないと言う大きな可能性を孕んでいます」

「だからこそさっきの質問か」

「ええ。質問の答えによっては、カミジールの事が何故これまで表に出てこなかったのか、そして陛下たちが本当は何を恐れているかがはっきりします」

本当に鋭い。

つい数刻前の説明であえて言わなかった部分を、敏感に察知している。

流石は『千里眼』、とイーリスは評価を上方修正する。

「お答えしますね。答えは、影響下にはない組織は存在しない、です」

「……それほど、ですか」

「ええ。それほど、です」

「暗殺ギルドも、魔法ギルドも、傭兵ギルドも、盗賊ギルドもですか」

「付け加えるならば、盾、矛、学、術の四機関も、ですね」

暗殺ギルド、魔法ギルド、傭兵ギルド、盗賊ギルドは文字通りそれぞれの能力を持った国に属さぬ者たちが集まっている組織だ。

その後述べられた四機関は、アークジュエル王国を支える四つの代表的機関を指している。

即ち、盾となる近衛騎士団、矛となる王国騎士団、学者や医者、政治家を育てる総合学園、魔法を研究し戦場でその猛威をふるう魔法院だ。

それらが影響下にあると言う事は即ち、国全てにカミジールの力

が浸透していると言う事を意味する。

「……他の貴族からの攻撃がどうこうとか、そんなのはささいな危惧、という事ですか」

「いいえ、カイル様。それこそが最もカミジール家が恐れる事です。民に平和を、安寧を。平穏無事な生活を送れるように、何時でも帰れる場所を用意する事こそが、カミジール家の目的なのですから」

「なるほど。むしろそちらの影響は王家こそが恐れる事、ですか」

「……カミジールが抜けたら本当に穴だらけになるって事か、この国は」

「ええ、そう言う事ですね。利害の一致と言えるでしょう、そういう部分では」

カミジール家は平穏を。王家はその影響力を。

それを護るために、両者が交わした契約は護られ続ける。

「……責任重大になってきましたねえ、キースさん」

「ああ。知った秘密が思った以上にでかくて押しつぶされそうだ、カイル」

「まあ、それは良いんです。もうどうしようもないですし、お二人には先ほども言った通りカミジールに属してもらおう予定ですし……余計に口を滑らせたりしなければ」

「さらっと怖い事言うなあ……」

「問題は！ アイリスをどうやって殿下の毒牙から護るか、という点です。まあ、プランはありますが」

「……アイリスを呼ぶんですか？ お嬢様」

「ええ。アイリスを実家に帰して代わりにアイリスを呼びます。そうすれば万事解決です。今後の展望も含めて」

「確かに、それが一番良いですか。今回の一件を考えると、もし次でお嬢様が帰される事になったとしても此方に残る手段は持っていた方がいいですねえ」

「でしょう？ とりあえず、またお父様に手紙ね……。後、三公のどなたかに根回しをお願いしておかないと」

「……イーリス様？ その、アイリスというのはいったい……？」

「ああ、アイリスというのはアイリスの妹です。それ以上は……そうですね、あの子がこっちに来た時にでも説明します」

それまで楽しみにしててください、とカイルに笑いかける。

二人が驚く姿が目に見えかぶ。

少し楽しみだ。

「さて……。夜も大分遅くなってきましたし、キース様とカイル様はそろそろお帰りを。そういえば護衛の任って、ずっと外に張り付

いているんですか？」

「ああ、いいえ。流石にずっとではないですね。此方も仕事がありますし。付くのは主に候補者の方々が外出する時です。無論、要求されれば一晩中付いていますが……そうしますか？」

「いえ、それには及びません。お嬢様の警護は私一人で十分ですし、お嬢様もかなりの手練ですし……」

「それを差しておいても、複数の間諜が見張っているこの部屋は安全ですしね。ああ、無論他の候補者の方々にもカミジールの息がかっている者たちが影ながら護衛しています」

とくに有力候補の方々は、と説明。

ちなみに非有力候補に付いている面々は情報収集役の側面が強い。

何を仕出かすか分からない部分が大きいからだ。

「そうですか。それでは、僕たちはこれで失礼しますね」

「また明日、業務後に警護に来る。そうでなくても外出する際には侍女を通して連絡をくれ。こっちもこっちで大事な仕事だからな」

「はい、わかりました。それではお休みなさいませ、お二人とも」

「ああ、おやすみ」

「おやすみなさい、イーリス様。良い夢を」

「父上！」

「……レンか。どうした、こんな時間に。それもノックすらせずに」

「あ……し、失礼いたしました」

王の執務室。

イーリスから上がって来た報告から今後自分が取るべき動向について想いを馳せていたブラッドリーは、突然部屋に入って来た息子を睨みつける。

不安定だ、と思う。

この息子は幼い時にあまりにも暗い世界を見てしまった。

自分が多くの側室を娶っていたせいで、その女たちが巻き起こす情欲と嫉妬に凝り固まった暗い闘争のただ中に置かれていたのだ。

おかげで貴族の女が嫌いになり、未だに嫁を貰おうとしない。

その割に花街やお手付きで准貴族の娘に手を出しているが、しかし貴族の女にだけは頑として目を向けなかった。

それがどうだ。

カミジール家に依頼したかいがあったと言うべきか、息子は全員

ではないが候補者と上手くやっていると言う。

ここ最近は精神的にも安定しており、今まで以上に政務へ積極的になっていた。

だと言うのに。

今日の前にいる息子は、その落ち着きが欠片も無い。

揺れている。

ふらふらと。

ゆらゆらと。

不安定に、心が揺れている。

「……何があった？ 申してみよ」

「え、あ……はい。その、陛下」

「父、で良い」

「……では、父上。その……カミジール家から一人、侍女を私の専属に召し上げたいのです！」

「……カミジールから、じゃと？」

カミジール。

その単語は、国の中枢から見れば禁忌であると同時に切り札である言葉だ。

ブラッドリーが王位を継いでからの四十年間に起こった全ての侵略戦争は、彼らのおかげで乗り越えられたと言って過言ではない。

それほどまでに、その名前が持つ力は強大だ。

そして今、その名前から人を引き抜きたいと言う。

「……理由を問うておこう。何故じゃ？」

「その……先ほど、アイリスというカミジール男爵令嬢の侍女に会いました。そして――」

話す息子の目には情愛の熱が宿っている。

まさか、とは思う。

「王族にあるまじきとは思いますが、レンフィールド・メイス・アークジュエル、その侍女が欲しくてたまりません」

「……欲して、どうする」

「我がものとして、屈服させます」

「屈服……じゃと？」

レンフィールドが見たのは間違いなく侍女に扮したイーリス・ミル・カミジールだろう。

あの少女は、余計な演技などが無ければこれでもかというくらいに人を惹き付ける求心力がある。

力強い瞳。

強固な意志。

不屈の魂。

珍しい黒髪黒目も手伝い、その燃えるような気迫は相対する全ての人間に影響を与える。

かくいうブラッドリーも、初めてイーリスに会った時は魂が震えた物だ。

齡十の幼子に。

勝てないと、殺されると、一瞬でも思ってしまったのだから。

「ええ。あの力強い瞳……。炎のような煌めき。私はあれを、私の自ら手折りたいのです」

「……………レン」

「初めてです、王族たる私に、俺にあんな目を向ける侍女は！ 面白いと、心底そう思いました。だからこそ、あの目を穢したい、壊したい。こんな衝動も初めてです……っ！」

「レンフィールドっ！」

「……………っ!？」

怒鳴る。

これは、まずい。

なまじあのようなタイプの女性が周りにいなかったせいか、その煌めきに飲まれかかっている。

（ここしばらくはお手付きも花街へのお忍びもしていなかったから、欲求不満がたたって妙な変化を起こしおったか）

やっかいな。

イーリスに関してはただでさえキース・ウーヴァとカイル・シレットの二名が偽りの姿を見破っている。

あの二人はカミジールに取り込むという事で話が付いているが、レンフィールドはまずい。

カミジールと王家が直接つながりを持つような事は、あってはならないのだから。

「……………許さぬ」

「父上っ!」

「詳細は話せぬが、カミジールに手を出す事はワシが許さぬ」

「……何故ですっ！ たかだか侍女を一人引き抜くのに、何故っ！」

「詳細は話せぬと言っておる。話はそれだけか？ ならば部屋に戻って明日の茶会に備えよ」

「父上っ！」

「お前は今大事な時期だ。時期王妃を選ぼうと言う中、それこそたかだか侍女一名に心を乱すと必要などない」

「ですが、父上っ！」

「くどいっ！ 部屋に戻って頭を冷やせいっ！」

ギリ、と齒を食いしぼる音が聞こえる。

「……失礼しました」

抑えた声で退室を告げ、レンフィールドは部屋を出ていく。

「……困った事になったのう」

どうしたものか。

とりあえずは、今回の事をイーリスに伝える事から始める必要があるだろう。

どうにも、レンフィールドがあのまま素直に引き下がるとは思えない。

自分が懸想している相手がアイリスという侍女ではなくイーリスである事に気が付いていないが、万が一気づかれてしまえば色々問題が出てくる。

主にカミジール家との盟約についてだ。

「これがリンスミートならまだ……手が無いではなかったんだがなあ」

第二王子ならば、いざとなれば王位継承権を剥奪して貴族の養子に出すという手がある。

事実、側室との間にもうけた子供は全てそうしている。

イーリスの秘密をしったキース・ウーヴァもその一人だ。

「やれやれ……。これも自分が歩んできた道のつけ、という奴か……」

後悔はしていない。

だが、こうして自分に帰ってくると、思う所が無いわけではない。

「次代を担う若者に託すしかない、というのが齒がゆいことじゃ……。すまないな、シーゲル。お前の娘は、まだしばらく波乱の渦中にいる事になる」

ここにはいない年下の友人に向けて呟く。

大分年齢差はあるが、彼の父と二代に渡りブラッドリーの友人などというものになってくれている。

そんな友人の子に面倒な役割を持たせてしまっている事を心苦しく思いながら、自分の間諜を呼ぶ。

出来る限りのバックアップを行う事を伝言に添えて、今の顛末をイーリスへと伝えるために。

全てはカミジールの手の上で（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

サブタイトルは適当に。カミジール家の影響力を端的に表してみました（え）

レンフィールドの株が下がっていますが、仕様です。今後上がるかどうかは微妙にわかりません。

むしろこのままレンフィールドはイーリス争奪戦から堕ちていくような気がしてならない今日この頃。ほんとにどうなるんでしょうか、教えて執筆の神様！。

さい様、社怪人様、感想ありがとうございました！ 本当に励みになります！

次回はきつと話が動くはず……。

大臣の陰謀についてわかった事とか、そのあたりを書ければいいな、と思います。

それでは、次回の更新で。

感想お待ちしています。

ダイレイヌ魔法国（前書き）

えー、久しぶりの投稿になりました。お待たせして申し訳ありません。

約一カ月の時間が経ってしまいました……。うう、筆が遅くて申し訳なく。

今回の投稿に合わせ、1話と2話を加筆修正してあります。

今後もしつづ以前の話を修正していきますので、よろしくお願ひします（礼）

ダイレイス魔法国

イーリスがアイリスの姿で王子に迫られてから、一週間の時間が立っていた。

その間、レンフィールドの態度が問題になっている。

アイリスを、一心に見つめているのだ。

他の候補達とのお茶の時間でも。

何回か開かれた夜会の時にも。

あまつさえ、イーリスと二人でする事になったお茶会の時は、あからさまにアイリスにだけ話しかけていた。

それで、他の候補達が色めき立たないはずが無い。

むしろそれでレンフィールドが嫌われるならともかく、イーリスに非難が集中するあたり腹が立つ。

何が、侍女を使って王子を取り込もうとしている、だ。

迷惑しているのは此方だと言うのに。

イーリスも立場上、アイリスを叱らなくてはならないし、それでアイリスを下げると今度は王子に睨まれる。

どうしろというのだ。

「いっそレンフィールド殿下を暗殺出来れば話は簡単なんだけどな……」

「イーリス様っ！ 滅多な事を仰らないでくださいっ！」

「そうだ、誰が聞いてるんだかわからないんだがら——いや、大丈夫なのか、イーリス嬢の場合は」

「まあ、この部屋を探ってるのは全部うちの息が掛ってる物たちですし……。それ以外が入りこもうとしても、忍んだ時点でうちの猫たちに狩られてます」

「アイリスの言うとおり、この部屋って今現在だと多分陛下のお部屋より警備が厳重なのよね……。ちょっと問題かしら。アイリス、陛下の傍に二人配置しておいて」

「かしこまりました」

すぐに連絡してまいります、と一礼してアイリスが部屋を出ていく。

王子の気配を感じたら逃げるように、と伝える事も忘れない。

本当に、もう面倒くさい。

「……そんなにすぐに増やせるものなんですか？」

「ええ、ある程度は。それにしても……はぁ。本当に、どうしたもののやら」

「そういえば、この前仰っていた対策とやらはどうなったのですか？
確か、アイリスさんの妹を呼ぶ、と」

「ああ、それは……。ちよつと難航していて。……キース様とカイ
ル様はご存知ですか？ 傭兵国が再び此方に兵を出そうとしている
話を」

その言葉に、二人の近衛騎士たちは深く頷いた。

「まだ確定の話ではないですが、確かに出兵の準備をしていると情
報が入ってきています。やはり目的は、アークジュエルですか」

「ええ。そしてその真偽を確かめ、さらに詳細な情報を得るために
カミジールは今全力を挙げてるんです」

「……つまり、此方に割く余裕は殆どない、と」

「そうですね。他の三国経由で入ってくる間諜を特定、始末するの
に暗殺ギルドや盗賊ギルドまで全力で働いている状況です。そして
これは不確定情報なのでまだ誰にも話してもらいたくは無いのです
が、傭兵国と共謀して魔法国が挙兵するという話まで出てきている
んです」

「魔法国が……っ!？」

「東西二面の挟み撃ち、ですか。厄介ですね……。東からの物量戦、西からの大規模魔法戦。これは、今までの歴史から見ても類が無いですから」

「ええ。傭兵国と魔法国に限らず、周囲四国は互いに中が悪いですからね……。いがみ合っていると断言していいと思います。ですが、それ以上にアークジュエルが目障りだ、という事でしょう」

ダイレイス魔法国。

国名の通り魔法の研究が非常に盛んな国で、高名な魔法使いを何人も排出している国である。

魔法が盛んな理由は、建国の歴史にと非常に狭く痩せた領土が理由としてあげられる。

ダイレイスの建国王は当時ユーレスト神聖国に属していた貴族の一人で、そもそも領土自体がユーレストの国土だったのだ。

ラファエル・ジス・ダイレイス。

ユーレストの魔法院で院長を代々務めていた貴族の出であった彼は、三十歳の時に祖国に反旗を翻して自信の領土をダイレイス魔法国と名乗り、王として君臨しようとした。

その背景には、法術を至上とし魔法を下術と蔑む神聖国の風土が有ったと言う。

ラファエルは天才と呼ばれる魔法使いだったが、だからこそ他の法術師たちに苛められ、蔑まれた。

それを疎んじて独立し、当時のアークジュエル王家が支援した事もあり無事に独立できたのだ。

しかし、ダイレイスの土地は枯れていた。

不毛の地であると言い変えても良い。

独立と共にユーレストで迫害されていた魔法使いが集ったダイレイスでは、自分たちの土地を肥沃にするための研究が非常に盛んにおこなわれる事となる。

必然的に魔法研究の最前線となり、同時に科学的な栽培法などでも他国を圧倒するほどの発展を見せた。

技術や知識が発展すればそれを求める者たちが訪れるのは当然であり、さらに発展していくと言う好循環が生まれる。

『都市部では魔法が使えない』というエウロパ大陸独特の法則により、都市部以外の土地が少なかったダイレイスは非常に苦労したようだが、高層型の住居を考案し建設する事で都市部を減らし自給量を上げようとした。

当初はそれで何の問題も無かった。

元の所属国であるユーレストとの仲は悪いままであったものの、その他の隣国とは良好な関係を築いていたのだ。

四代前の王までは。

三代前——ダイレイスからすれば五代目の治世で、そのバランスが崩れた。

魔法こそが至上の技であると、過去自分たちがされた迫害を忘れたかのように王が魔法以外の技術を迫害し始めたのだ。

同時に一部のエリート魔法使いたちがその思想に染まり、それから魔法国の何恥じない魔法至上思想が国全体に広がっていく。

魔法使いでない者は人ではない。

当時の王が言ったそのセリフは、今でも魔法国に根づいてしまった思想であり、他国から反面教師として見られている言葉だ。

五代目の時代に魔法技術をより高めたダイレイスは、六代目の時代に他国へ侵攻していく。

元々不仲だったユーレストは勿論のこと、肥沃な土地を求めてアークジュエルにも侵攻してきたのだ。

結果として恩を仇で返されたとアークジュエルは激怒。ユーレストと同調してダイレイスを撃退する事に成功する。

六代目はそれで失脚し、七代目——即ち前王は先の騒乱で生じた亀裂を修復するように、ユーレストとアークジュエルに対して友好政策を打ち出した。

七代目が崩御して代変わりしてからすでに五年。

前王の政策を引き継いで友好的な関係を保ってはいたが、それは

どうやら表向きの話だったらしい。

「幸いなのは技術国と神聖国は動く気配を見せていない、という事です。この上周囲四国に同時攻撃を受けるなんて話になったら笑えませんし」

「しかし、イーリス様。そうは言っても、今仰った事になる可能性は決して低くないのではないでしょうか」

「その通りですよ、カイル様。だからこそ、そうならないように動くのが我々です」

「……諜報国の腕の見せ所って奴か」

今更の話だが、アークジュエルは諜報国と呼ばれている。

今の王になってからは一度も戦争が無かったために大部分の国民は自覚が薄い、アークジュエルが平和を保っている背景にはその圧倒的な情報収集能力が挙げられるのだ。

実の所それだけの力を持つようになったのはカミジールが国に重用され、安定して質の良い間諜を育てられるようになったのが大きい。

無論それ以前からも他国に比べて情報収集に重きを置いていたが、専門の育成機関などは無かった。

「神聖国が魔法国に、技術国が傭兵国と争いになるのを後押しするわけですね？」

「ええ。実際に戦争にならなくても、その気配がある、というだけで十分牽制になりますからね。上手く行けば戦争自体も回避できるかもしれません」

周囲四国間の関係が良くないのも、アークジュエルが悟られないように手を廻しているからだ。

結局の所、自国が一番大事にあのである。

「……お嬢様、殿下を警護する人数を増やしてきました。そして――法務大臣がいつ事を起こそうとしているのかも判明しました」

戻ってきたアイリスが報告と同時に新しい情報を持ってきた。

ここ一週間、法務大臣の動きは無い。

侍女の配置換えをしたと言う話もないし、手の物を王城へ潜り込ませたと言う事も無いのだ。

つまり、自らの手で暗殺を企てるか、あるいは既に王城にいる法務大臣派准貴族の令嬢――侍女を使って起こすかと手が絞られている。

キースとカイル、二人の頼もしい護衛に視線を向けると、双方ともに真面目な顔で頷きを返す。

それを見た後で、アイリスに報告を促した

「決行は明日の夜会で。標的はシーリン・イフ・ルフーナ様です」

「シーリン様だと!?!」

「正妃候補の大本命ですか。これは……最悪の展開ですね」

「……アイリス、暗殺の手段は分かってる?」

驚愕の声を上げる騎士たちと異なり、イーリスは難しい顔をしながら問いかける。

「今の所特定はできていませんが、恐らく毒殺かと。なので販路を監視しながら、動向を探るよう指示を出しています」

「ん、ならいいわ。それにしても毒殺、か……。アイリス、明日の夜会にどれくらい忍びこませる事が出来るかしら?」

「……現在城内にいる手の者たちを総動員したとしても、自由に動かせるのは十人が限度ですね。それ以上は怪しまれますし」

「そうよね……。うん、もうこうなったら、仕方が無いわね。毒を食らわば皿までと言うか——どうせいつかはばれるしばらさなきやいけなかったんだから、それが少し早まったと思えば問題ないか」

自分の思考の中で勝手に自己完結していると、カイルが不思議そうな声で問いかけてくる。

一体何がですか、と。

「……リンスミート殿下を、此方の陣営に引き入れます。『真実の目』の力を使って、暗殺者を割り出す為に」

ダイレイス魔法国（後書き）

というわけで、第十四話をお送りしました。

国内の陰謀だけでなく、国外もきな臭い中、はたしてイーリスはどう動くのでしょうか。

作者もいまだに展開に迷ってます。

おかしいなあ、ラブコメだったはずなのに。どこで間違った。

今回は、ついになぜか人気なリンスミート君の出番です。まだほとんどしゃべってないくせいに、第一王子がアレな成果人気なんですよね、彼。

それでは、次回はできるだけお待たせしないようにできればいいなと思いつつ

失礼しますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182p/>

忍姫イーリスの受難

2011年1月21日10時43分発行